el zine

vol.15



Finland Punk Now!

1981

2000´s Finnish

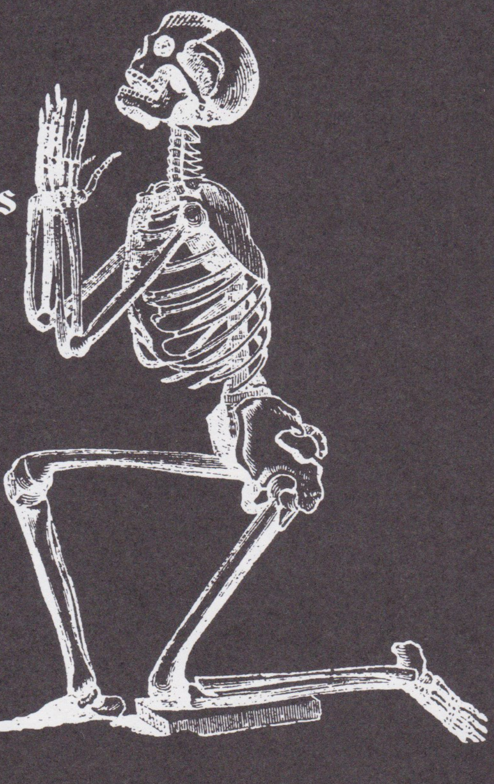
Punk / Hardcore Disc Review

THE T★55'S SAD BOYS GIUDA

Thisclose SCUMRAID SOW THREAT



contents vol.15




never give up!



1981

フィンランド産、哀愁のメロディック・アナーコ・パンク・ロック・バンド、1981が6月に日本ツアーをすることになった(前半はSKIZOPHRENIA、後半はTHE C-3'sが同行)。
1981のEPを聴いてから虜になりメンバーに連絡をとった、言ってしまえば単なるファンだった自分がまさか日本ツアーの企画をしたり、音源をリリースすることになるだなんて…、PUNKってやつはこういうことが平気であるからいつだって刺激的なのであろう。
さて、今回1981のツアーに先駆けて中心人物であるJALLU(1981の他にKIELTOLAKI、PHOENIX FOUNDATIONにも在籍)にインタヴューしてみた。
自分が以前出してたVOX POPULIという名のZINEを発刊してこのインタヴューを載せずにel zineに載せてもらった理由は、単により多くの日本のパンクスに触れて欲しかったということ。
そう!まさに全パンクス、いや、全人類必聴なので、是非とも各会場に足を運んでいただきたい!
この話を快く引き受けてくれた山路さん、翻訳を手伝ってくれたクリーミーさんに感謝!

INTERVIEWED:YU(VOX POPULI/SKIZOPHRENIA)

■1981の歴史を教えて!
「Janne、オリジナル・メンバーのValtteri、そして僕がBRIDGETというインディー・ポップ・バンドを組んだんだ。
それから、ドラマーがトゥルクから引っ越しして、活動が停滞してしまって…、それで色々考えて、新しいバンドを組もうと僕がメンバーに提案したんだ。それが1981で、2009年の終わりだね。Kataが2010年の終わりに加入して、それから2、3ヶ月後にIlmariがオリジナル・ドラマーの代わりに入ったんだ。Valtteriは本当に彼の別プロジェクトが忙しくて、Anttiが2011年夏に加わった。

下記が僕達がリリースした音源:
「Faster & Forward」7"EP
(Passing Bells,2010/Social Collapse!,2011)
「Decay」7"EP(Kämäset Levyt,2011)
「Split」7" w/Surrender(Stonehenge,2011)
「Cycle/Symptom」7"(Profiteer,2012)
「In The Dead Of The Night」7"
(Profiteer/Stonehenge,2013)
これからのリリース予定:
「Solutions/Dancing」7"
(Passing Bells/Profiteer)
「Anthems for Doomed Youth - singles and ep's 2010 - 2014」LP(SVART)
「Anthems for Doomed Youth - singles and ep's 2010 - 2014」CD(VOX POPULI)
「Dancing」12"(SVART)
「Japan Tour」7"(VOX POPULI)」

■僕的に1981っていうバンド名はかなり渋いと思うけど、どうしてこのバンド名をつけたの?

「"1981"というのをつけるにあたっての理由は特別にはないんだ。でも、'77パンク・ロックから'82の爆発的なハードコア・ムーヴメントの時代は、音楽的に凄いフィットしたし、"1981"という名前は、短くて、見た目とサウンドも良いしね。
"1919"というポスト・パンク・バンドを聴いてた時にアイデアが浮かんだんだ」

■1981の音楽はUK 80'sのアナーコ・パンクに影響を受けてるって感じるけど、どんなものに影響受けたの?

「最も強い影響は、ピース/アナーコ・パンク、その中でも特に、色々なジャンルの音楽的影響を取り入れたOMEGA　TRIBE、ZOUNDS、POLITICAL　ASYLUM辺りかな。彼らは所謂"パンク"という音楽を沢山はしてないけど、彼らの原則、DIY精神は強く、ピース/アナーコ・パンクがどんな物かと示した。僕達は同じようにいくつかのポスト・パンクやインディー・ポップからも影響を受けたんだ」

■1981のアートワークは素晴らしいけど、君が作ってるの?なんかに影響されてたりする?

「ほとんどのアートワークに関して僕が責任者だね。僕はそんなに絵を描くのが得意でないから、SURRENDERとのスプリットや「Cycle/Symptom」のインナーなんかは雑誌のイラストを描いてたAnnaが手伝ってくれている。"punk in finland"というフォーラムで彼女の作品を見て、彼女に僕達を手伝ってくれないか聞いてみたんだ。
アナーコ・パンクは僕達のもっとも大きな音楽的影響であるし、自然と僕達のアートワークにも、それが影響をするね。 僕は古いイギリスのアナーコ・バンドのジャケット・デザインを愛してる。だから、"1981"のアートワークをする時は、その影響





クは日本の国旗も連想できてしまうけど。
「そのアートワークに特別に深い意味はないね。単にかっこよいデザインを作って、人それぞれに独自の解釈をしてもらうこともあるんだ。80年代のアナーコ・パンク・バンドっぽいのを作りたかったというのもあるね。僕的に鳥は自由を象徴して、この場合、その鳥が息絶えて落ちている。背景の太陽は、日本の国旗の意味はなく、同じようなデザインを使っている昔のアナーコ・パンク・バンドへの賛辞みたいなもんだよ。
もちろん、古い日本の国旗が軍で使われてたのは知ってる。僕はアートワークで戦争関連のものを使うけど、それが常に戦争反対であることは明確にしないといけない。個人的には、戦争の旗のデザインが広島や長崎の恐怖を思い出させると思う。非人間的な行為をした731部隊なんかも。その歴史は日本のものだけど、戦争は常に顕在している。人間の歴史において、この惑星が平和だった瞬間はなかった。常に民間人は苦しみ、人々はコントロールしたがるヤツラに苦しむ…。戦争の名のもとに正当化されていることが決して終わらないだなんて唖然とするよ…」
■「Cycle/Symptom」7"の表ジャケは?珍しく写真使ってるけど、なんの写真??
「その写真は1981年におこったブリクストンの暴動の写真だね。少年が燃え盛る家の前に立っている姿がすごい好きだったから表ジャケに使ったんだ」
■1981の歌詞はこの狂った世の中の悲しい現実を歌ってるけど、1981を通して伝えたいことはなに?
「そういう歌詞を書くことは僕達には凄くぴったりだね。ハッピー・ソングや、自分の視点を他人に問うなんて僕自身想像できないし。それに、僕には、どれが正しくてどれが間違ってるなんて言う権利

はすごいんだ」
■アートワークにおいてこだわりとかある?
「僕はハンドメイドの作品が好きだね。最後の仕上げだけ、コンピュータを使うだけでね。直線を描くだけでも、コンピュータでなくて、ペンと定規を使ってるよ。あとは、古い本、ファンジン、新聞なんかをスキャンしたりくらいかな。
文字に関しては、古いタイプライターを使うのが好きだし、刷り込み板やフリーハンドで書いたりね。あと、何年も何年も経った古い本で使われていた、"時代を超越した"クラシックなフォントを使ったりもするな」
■いくつかのアートワークについて質問!「The Only Government Is Yourself」デモの表ジャケはどんな意味がこめられてるの?太陽のマー

は、持ってないと思うんだ。不幸な現実だけど、ほとんどの人は自己的で馬鹿だよ。僕は、グローバルな変化やより良い未来には、本当に悲観的だね。不満について歌を書くことが、それらに対して対抗する手段だ。だけど、大きなレベルでの変化は、そんなに期待してないね」

■1981の全てのリリースはメンバー・クレジットが載ってないけど理由はある？

「特別な理由はないね。個人的には、人々が各々のリリースでプレイしているメンバーの名前を知るのはそんなに重要ではないと思うしね。新しいバンドの最初のリリースのメンバー・クレジットで、他のバンドのメンバー・クレジットと比較されるのは好きじゃないんだ。たぶん、それが名前を載せなかった理由の一つだろうね」

■君はいつどのようにして初めてパンクに触れたの？

「僕の友達の兄貴から入ったね。14か15位の時でバンドはTERVEET KÄDET、TAMPERE SS、RIISTETYT、INSTIGATORSとかSUBHUMANSを教えてもらった。

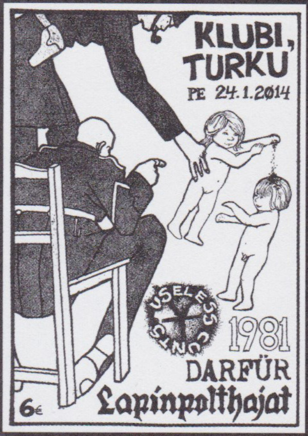
僕自身、直接買ってたToinen Vaihtoehtoジンも彼から教えてもらったね。そのジンは、フィンランドのバンドやパンク・シーンに関して僕の知識を広めたよ」

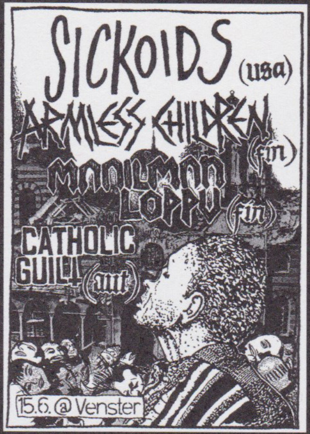
■君の住んでるトゥルクと、トゥルクのパンク・シーンについて教えて！

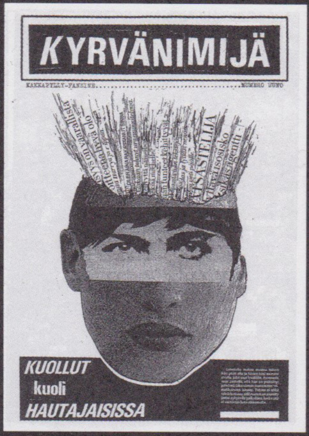
「トゥルクはフィンランドで3番目に大きな都市で、それに、最も古い街だし、過去にはフィンランドの首都だったこともあったんだ。不幸なことに、古い建物のほとんどは当時の街並みを失って、70年代スタイルのビルに代わってしまったよ。まぁ、いくつかいい感じの古い街並みもあるけどね。

トゥルクのパンク・シーンはとってもいいよ。活発な人達の動きはしばらくあったし、本当にいいバンドもいくつかいたしね。その時、ギグができるい









い場所がなかったけど、状況はすぐに良くなっていくと思うよ」

■最近のフィンランドのバンドで一押しのバンドは??

「最初に浮かぶのはMAAILMANLOPPU、KYLMÄ SOTA、ARMLESS CHILDREN、PERIKATO、KUUDES SILMÄ、SOKEA PISTE、WHITE TEARS。

2、3日前、LAPINPOLTHAJAT、DARFÜR、USELESS CUNTSとトゥルクで大きなギグをしたんだ。みんなすげーかっこよかった」



■Kyrvänimijäというジンを作ってるけど、どんな内容なの?定期的に出してるジン?

「Kyrvänimijäは一回きりだけ作ったジンで、僕が2009年に作ったPillunnuolijaジンの続編みたいなもんだね。バンドをやってるいくつかの友人にインタヴューしたり、いくつかのコラムを書いたり、漫画を描いたり、映画レヴューを書いたり。Kyrvänimijäは嫁がドイツに一週間行ったときに書いた"独りの男の日記"を主としてるね。これらのジンは単なる楽しみで作っていて、友達や興味を持ってそうな人にあげたよ。他のジンを作るという活発な計画はないけど、不可能ではないし、5年後くらいに作るかもね」

■フィンランド人はお酒好きが多いみたいだし、君もワイン狂いだよね?一週間にどれくらいのワイン呑むの?

「あはは(笑)。赤ワインが大好きだということは認めざるを得ないね…。実際、週に5、6本は呑んでるね…」

■君は日本の映画が好きだよね?好きな日本の映画TOP 3を教えて!!

「好きな日本映画を3本挙げるのは難しい質問だ…。最初に心に浮かぶのは、"子連れ狼"と塚本晋

也が絡んでる映画かな(塚本晋也がディレクションしてる映画で悪いのはなかった)。"ピノキオ√964"、"Rubbers Lover"、"HOUSE ハウス"も忘れられない映画だよ。
あとは70年代、80年代の忍者/侍関係、90年代の変わったサイバー・パンク系とか、オブスキュア/興味深い映画は、日本に限らず全世界のものが好きだよ」
■日本や日本のパンク・シーンにどんなイメージを持ってる??
「僕は今まで日本に行ったことがなくて、やっと行けるから心底、興奮してるよ！僕にとって完全に新しい文化の経験になるからね！
日本のパンク・シーンはそんなには知らないんだ。KIELTOLAKIでCHAOS IN TEJAS(2011)に参加したとき、ISTERISMO、ORIGIN OF M、D-CLONEと共演したよ。ツアーでフィンランドに来た時にDSBのメンバーにも会った。SKIZOPHRENIAとTHE C-3'sの音源は大好きだから、両バンドとツアーするのはとても楽しみだよ」
■最後に読者になにか一言!!
「STAY PUNK!!!STAY DIY!!」

1981 "NO HOPE AHEAD JAPAN TOUR"

6/14(sat)東京ANTIKNOCK w/SKIZOPHRENIA
6/15(sun)名古屋RED DRAGON w/SKIZOPHRENIA
6/16(mon)大阪KING COBRA SQUAT w/SKIZOPHRENIA
6/17(tue)広島AGIT
6/18(wed)津山K2 w/SKIZOPHRENIA
6/19(thu)四日市VORTEX w/THE C-3's
6/20(fri)水戸90east w/THE C-3's
6/21(sat)郡山STUDIO TISSUE★BOX w/THE C-3's
6/22(sun)東京EARTHDOM w/THE C-3's

more info : http://vopo.exblog.jp



2000´s Finnish Punk / Hardcore Disc Review

2000年代フィンランド・パンク/ハードコア音盤紹介

1981のインタヴューに続いては、2000年代に入ってからリリースされたフィンランド・パンク/ハードコアの作品をYuさんに紹介してもらいました(僕も少しだけ書いてます)。フィンランドというとどうしても80年代のバンドに目が行きがちですが、骨董品を愛でるジイさんじゃあるまいし、今の音源・バンドを聴いてナンボでしょ!…というわけで、お楽しみ頂ければ幸いです。(山)

TEXT:YU(VOX POPULI/SKIZOPHRENIA)/山路健二

1981/ANTHEMS FOR DOOMED YOUTH - SINGLES AND EP'S 2010 - 2014



遂に6月に日本にやってくる1981のシングル集!!彼らがリリースした5枚のEP(最新シングルである「SOLUTION/DANCING」7"も!!)とSURRENDERとのSPLIT EP、さらにこのCDにはボーナス・トラックとして、日本にはほとんど出回ってきてないV.A『TERMINAL DECAY』LPに収録されてる"NIGHTMARE/REALITY"の再録ヴァージョンも収録!!80's UK ANARCHO PUNKと呼ばれるバンドは素直に音楽が素晴らしいバンドが多いけど、1981もまさにそれ。ひたすらかっこいい。それが故に悲しい現実を表現してる歌詞にも目が行きやすい。しかし、アルファベット順とはいえ、自分のリリースを一番最初に紹介しているのが自分の厭らしさが露骨になっているようだ(笑)。(Y)

(VOX POPULI 004)CD 2014年

AKUPUNKTIO/13 TRACK EP



2002年にタンペレで結成、"メンバーはまだ10代前半のガキンチョらしい!"と、ここ日本でも局地的に話題になったバンドの初音源。怖い物知らずの天然のロウ・ハードコア・サウンドで、もし成人男性が真面目にやってこんな音を出していたらその人の正気を疑うところですが、ティーンなら全てが許される。テキトー!スノッティー!!アスホール!!!の三拍子揃った若さの結晶。というわけで、バンドはKOHU-63とのスプリットを出したりして、2007年に見事消滅。カゲロウの如き一瞬の輝き、潔し!(山)

(STAY FREE UNDERGROUND 16,HÖHNIE 86)EP 2005年

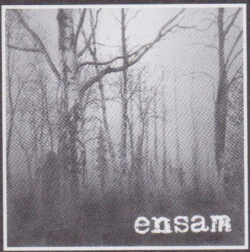
BACKLASH/REALITIES OF LIFE



2012年に函館のCRUDEと共にEURO TOURも行ったBACKLASHの1st ALBUM。世界中のHARDCORE BANDからの依頼も多い広島のSUGI氏が描いたジャケットからも音のほうは想像できるのですが、日本のHARDCOREからの影響も強い、ドラマティックなギター・ワークが印象的なHARDCORE！ヴォーカルがドイツ在住で頻繁にライヴできない状況って聞いたけど、ツアーを含め、可能な限り精力的に活動しているみたいだし現在のFINLAND HARDCOREを語る上では外せないバンドであろう！(Y)

(KÄMÄSET LEVYT 051)12" 2012年

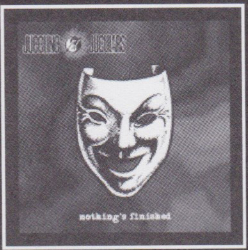
ENSAM/ST



ブラジルから移住してきた女性ヴォーカルがフロントに立ち、バックを務めるのはRIISTETYTとKAAOSのメンバー。同地のFIGHT RECORDSからリリースされた1stシングル(本作)は、BRO-CORE RECORDSからも米国盤が発売される等、結構な鳴り物入りでの登場となりましたが、この一枚を残してアッサリと消え去ってしまいました。英語とポルトガル語を駆使するスタイルも、オーソドックスなスカンジ・ハードコア的アプローチも悪くはなかったのですが、ウーン…もうひと頑張り欲しかった。(山)

(FIGHT RECORDS 049)EP 2005年

JUGGLING JUGULARS/NOTHING'S FINISHED



欧州4大女性ヴォーカル・ハードコアと言えば、フランスのLA FRACTION、ドイツのINNER CONFLICT、デンマークのTHE ASSASSINATORS、そしてフィンランドのJUGGLING JUGULARSですが(?)、JJのこの2ndフル・アルバムはキャッチーさが前面に出ているので、普段この手の音楽を敬遠している人にこそ聴いてもらいたい一枚になっています(しかしそんな人は本誌も読んでいない…)。切なくも力強い歌唱に英詞も相俟って、フィン・コア臭は皆無ですが、極上のアナーコ・メロディック・パンクであることに間違いはないのです。(山)

(TWISTED CHORDS 41)LP 2004年

KIELTOLAKI/MASSAHYPNOOSI



80年代のFINNISH HARDCOREを受け継ぐ遺伝子、KIELTOLAKIの1st ALBUM!これまでのリリース同様、80's FINNISH HARDCORE影響下のプロパガンダ式アパラ・ハードコア・パンクの連打で畳み掛ける！！PROPAGANDA RECORDSの12インチリリース同様、ブックレット付き！！今回インタヴューを行った1981のJALLUがギターなのですが、KIELTOLAKIのほうも曲のほとんどは彼が作ってるみたいで、すげえなおい！新しいアルバムもレコーディング済みみたいだからそちらも期待大！！アパラー！！(Y)

(FERAL WARD 065)LP 2009年

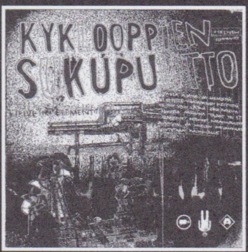
KOVAA RASVAA/IKUINEN PIINA



2009年に日本ツアーを行ったKHATARINAのKERTTUとANNEが在籍のKOVAA RASVAAの2013年作2nd EP!KHATARINAはD-BEAT主体のHARDCOREでしたが、KOVAA RASVAAはバカテクドラムを搭載しパワーアップ!!KHATARINA時代よりさらに力強く叫びまくるKERTTUのヴォーカルが印象的で、ジャケからも伝わってくるけどライヴでも暴れまくってる模様。その勢いでここ日本にもやって来てくれることを密かに期待しておこう！(Y)

(SVART RECORDS 222)EP 2013年

KYKLOOPPIEN SUKUPUUTTO/HELVETIN ELEMENTIT



KIROUSやTOTUUS、TAMPERE SSのメンバーからなるレイジング・スラッシュ・ハードコア・バンド。その2ndシングルがこちら。後の作品で魅せることになるストレンジ&カオスな変態性はまだ鳴りを潜め、今作ではコーラス多用のドタバタ・サウンドで遮二無二に攻め立てる。食い散らかすように歌うヴォーカル含め、各パートが自己主張しまくってて一音一音がとにかくエネルギッシュ。ゲートフォールド仕様で、亡くなったオリジナル・ベーシストに捧げられた一枚です。(山)

(KÄMÄSET LEVYT 023,MERCY! MERCY! 002)EP 2005年

LAPINPOLTHAJAT/ST



休止期間も挟みつつ、90年代後半から活動を続けるバンドの2009年発表の1stシングル。LAMAやAPPENDIXのラインで走る伝統的なスタイルながら、A面収録の3曲は比較的ハードな印象。一方、B面の2曲はスウェーデンのトロール・パンクの"2歩手前"みたいな甘過ぎないメロディが冴えており、これこそがこのバンドの本領と言えるハズ。今年に入ってからは過去の音源をまとめたCDのリリースにブラジル・ツアーと、ますます精力的に活動中!ジャケは死ぬほどダサいですが、現行のフィン・コア好きはマストのバンドでしょう。(山)

(KÄMÄSET LEVYT 034,HEAT WAVE 02,ROKU 028,HÖHNIE 113)EP 2009年

MAAILMANLOPPU/VALTAA EP



80's FINNISH HARDCOREを基軸にTHRASHにも通じる疾走感とフィンランド語で捲し立てるHARDCORE PUNK ATTACK!!1981のJALLUの運営するPASSING BELLSからのリリースの4曲入りEP！!KÄMÄSET LEVYTから出てる12"もこのEPと同じスタイルなのですが、同レーベルから出てるEP、COMBAT ROCKからリリースされるKUUDES SILMÄとのSPLIT EP収録の曲は、このバンドのもう一つの顔ともいえるPOST PUNK路線!!これがまたFINLAND PUNKっぽい哀愁たっぷりでたまりません！2011年結成以来、精力的にライヴ、立て続けにリリースしてて現在のFINLAND PUNK SCENEを担うバンドだとの声も多数で、これからの活動も期待大！(Y)

(PASSING BELLS 018)EP 2013年

MELUSAASTE/MANIFESTI KUOLEVAISILLE



TERVEET KÄDETのライヴで出会って結成したという逸話も素敵な、ヘルシンキの若きオール・ガールズ・パンク・バンド。ぶっちゃけ、UK82なルックスはパーフェクト！…音はまぁまぁ！なわけですが、リヴァーブかけまくった自由奔放なロウ・サウンドからは想像できないシリアスな歌詞(戦争犯罪や人種差別など)やその実直な活動姿勢を知ると(vol.13にインタヴュー掲載)応援せずにはいられません。続けてさえいれば"化ける"可能性を大いに秘めた希望の1stシングル。(山)

(HÄTÄAPU 15)EP 2012年

NEUROOTTISET PELIMANNIT/DISKOGRAFIA



そう！あれはFINNISH 80's PUNKのまだ見ぬ秘宝PUNK BANDとそれと出会った時に得る快楽を血眼となって探していたときのこと。このバンドの1st EP音源を友人にTAPEにダビングしてもらったときに"FINLAND 1985"と記載されていて、すっかり騙されたのと同時に、現行のバンドでドツボのバンドがいることに勝るものはないこと、なんだかんだで80年代を感じる音が好きなのだということを再確認させられたのであった。さてこの音源、編集盤なわけですが、これまでのリリース、未発表に終わった音源をも完全網羅！LAMA、ÄPÄRÄT、APPENDIXを我武者羅にしたようなRAW PUNK THRASH ATTACKが最高！！メンバーは現在、TERVEET KÄDET、LAPINPOLTHAJATで活躍中！！(Y)

(KÄMÄSET LEVYT 043)2xLP 2011年

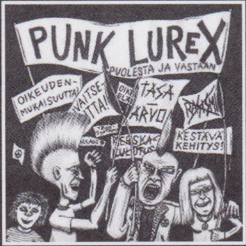
PERIKATO/KOVAT AJAT



数人のFINNISH PUNKSに「最近のパンク・バンドでオススメは？」と聞いたらほとんどが名前を挙げたこのPERIKATO。基本的にはFINNISH HARDCORE影響下なのですが、崩壊感を増したようなハードコア・パンクは日本でも人気の高いUUTUUSを彷彿させる！80's FINNISH HARDCOREの伝説、BASTARDSのカヴァーをしているのですが、言われてもよくわからないくらい、崖崩れ的ドラムを筆頭に崩壊してます。あっという間に崩れ落ちるかのように終わる9曲入り2nd EP。(Y)

(FULL CONTACT 033)EP 2013年

PUNK LUREX/PUOLESTA JA VASTAAN



70年代後期に活動したKOLLAA KESTÄÄ等のカヴァーをやってた"PORTTIKIELTO"に、まさかのKOLLAA KESTÄÄのメンバーが加入し93年にスタートしたのが"PUNK LUREX OK"。2003年に惜しくも活動休止し、5年の沈黙の後、復活を成し遂げ、待望の復活第一弾リリースがこのアルバム。自分がやってるVOX POPULIが日本での流通を担当。70年代後期のFINNISH PUNK影響下のバンドは数あれど、このバンドは特別だ！という現地のパンクスも少なくない。哀愁漂うPUNK ROCKに反体制の歌詞がその理由だと思うが、そのメッセージ性の強い歌詞の日本語訳付きで日本流通できたことは誇りに思う。SWEDENのEBBA GRÖNの大名曲"STATEN & KAPITALET"のカヴァーで幕を閉じる最高傑作アルバム！！(Y)

(KÄMÄSET LEVYT 050)LP 2012年

SELFISH/LIFE HAS NO VACANT TIME



二度の日本ツアーも行っており、ここ日本でも知名度、交友度ともに高いSELFISHの現時点での最新アルバム！JAPANESE HARDCOREに影響を受けたバンドは数あれど、日本のパンクスの誰しも文句が言えないくらいのPURE JAPANESE HARDCORE!!メンバーは他にもFORCA MACABRA、ILEGAL、KIELTOLAKI、KYLMÄ SOTAでも活動中！！今作の情緒あふれるジャケの絵を描いたのは"DISCARDED REMNANTS"氏。うん？なんかの曲名に似てるぞ？！と思ったら1981の女ヴォーカルKATAちゃんによるもの。(Y)

(FERAL WARD 071)LP 2013年

SOKEA PISTE/AJATUS KARKAA



このSOKEA PISTE、"うまく説明できない！"というのが一番このバンドを表現するのに適してるのではないでしょうか。声質がKAAOSのJAKKEに似てて、FINLAND語で歌ってるしFINNISH PUNKっぽさはあるのですが、ジャケ同様、不可解でスリリングで病的なパンク。この白ジャケは1stプレスでFINLANDの3レーベル共同リリース。2ndプレスは日本のMOUSE(D-CLONEのCD等出してるレーベル)も絡んでの共同リリース。さらには3rdプレスまで出てるってのが、このアルバムの中毒性を物語っていて、その病原体は今もなお拡散中！(Y)

(KÄMÄSET LEVYT 047,KARKIA MISTIKA RECORDS 022,TUSKA & AHDISTUS RECORDS 022)LP 2011年

TERVEET KÄDET/MUSTA HETKI + PIINAAVANAUTINTO



FINLANDの生きる伝説バンドTERVEET KÄDETの最新アルバム『MUSTA HETKI』と最新EP「PIINAAVANAUTINTO」を収録した、2013年の日本ツアー用に作られたCD！1980年1月にFINLANDで結成され、FINNISH HARDCOREの教祖的存在で様々なバンドに影響を与え続けてきたTK。ACTIVEに活動してなかった期間はあれど、結成から一度も解散することなく、今なお現在進行形で活動してて、しかも進化し続けてるのが今作からも感じることができるだろう。FINLAND以外でのツアーを敢行しだしたのがここ何年かの話で、もうすぐブラジル・ツアーも控えていたりで、まだまだ進化し続けそうだ…。おそろしや…。(Y)

(BREAK THE RECORDS 020)CD 2013年

ARMLESS CHILDREN + YDINASEETON POHJOLA/6 TRACKS SPLIT EP



ARMLESS CHILDRENは緊張感を重視したかのようなシンプルなリフを武器とするDISCHARGE影響下のバンド影響下のD-BEAT NOISE ATTACK!!80's SWEDISH PUNKのTATUERADE SNUTKUKAR(略してT.A.S.K)のカヴァーをしてるところも含めセンスを感じられずにはいられない！単独EPも出してるのでまだ手に入れてない人はレコード屋へ急げ！！対するYDINASEETON POHJOLAは80's EUROPE HARDCOREの影響を感じるHARDCORE PUNK ATTACK!!首絞められて泣き叫んでいるようなヴォーカルが強烈！！そしてなんとTHE COMESのフィンランド語カヴァー"PANIIKKI"を収録！！こちらもEPやら片面12インチやら出てますよっと！(Y)

(NIGHTSTICK JUSTICE RECORDS 013)EP 2013年

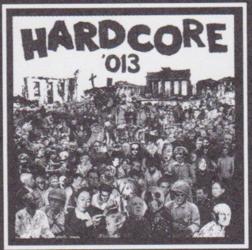
PÄÄ KII + LAPINPOLTHAJAT/OUTO HEDELMÄ SPLIT EP



KAKKAHÄTÄ 77、NAZI DEATH CAMPのメンバー在籍のPÄÄ KIIはKOLLAA KESTÄÄ、RATSIA、YPÖ-VIIS等の70's FINNISH PUNK狂も納得のセンス抜群のプンク・ロッキ2曲を収録！！一方のLAPINPOLTHAJATはEPや2枚のLPが日本でも評価が高いですが、相変わらずなHARDCORE夜明け寸前のLAMA路線のHARDCORE PUNKが最高！！ドラムはSOTATILA/KÄMÄSET LEVYTのJUKKA!!両バンドとも古き良き時代の音を継承しつつ、2010年代のFINNISH PUNKとしてバリバリ活動中！FINNISH PUNKの灯が消えることはない。(Y)

(KÄMÄSET LEVYT 063)EP 2013年

V.A/HARDCORE 013



タイトルどおり2013年に出たFINLANDのバンドを集めた、ABORTTI13(!)のCHAOS UKのカヴァー(!)から幕をあけるCOMPILATION LP！ABORTTI13、RAYGUN、SEKAANUUSという80's FINNISH HARDCORE好きにはお馴染みの復活組から、生きる伝説TERVEET KÄDETに、日本にもやってきたFORCA MACABRA、活動歴長いVIIMEINEN KOLONNA。他にもMAAILMANLOPPU、LAPINPOLTHAJAT、WHITE TEARS、AHNEUS、KONKURSSI等、22バンド、47曲入りの2枚組LP!!!FINLANDの最重要レーベルKÄMÄSET LEVYTから出た、現在のFINNISH HARDCORE SCENEを知るうえでは外せない一枚！！(Y)

(KÄMÄSET LEVYT 065)2xLP 2013年

V.A/LAATIMINEN ÄPÄRÖILLE - FINNISH PUNK HC COMPILATION 08



上記コンピの2008年版とも言えそうな作品ですが、本作の面白い点はフランスの複数レーベルによるリリースだということ。そのためか、フィンランド・ハードコアの歴史をたどるインタヴューや収録バンドの紹介、MRR記事の転載(84年のフィンランド特集)が載ったブックレットは大ヴォリュームで、当地のシーンを客観的に捉えようとする姿勢が伺えます。SOTATILAからAKUPUNKTIO、KUOLEMA等々、玉石混交の14バンドが参加した必殺盤。そして2008年がもう6年も前だということにショックを受けます。光陰矢の如し!(山)

(PASKA,I FEEL GOOD,AMERTUME,DEVIANCE,1984 REALITY TODAY,WEE WEE,SMYT,CRAPOULET)LP 2009年

2000's Finnish
Punk / Hardcore Disc Review

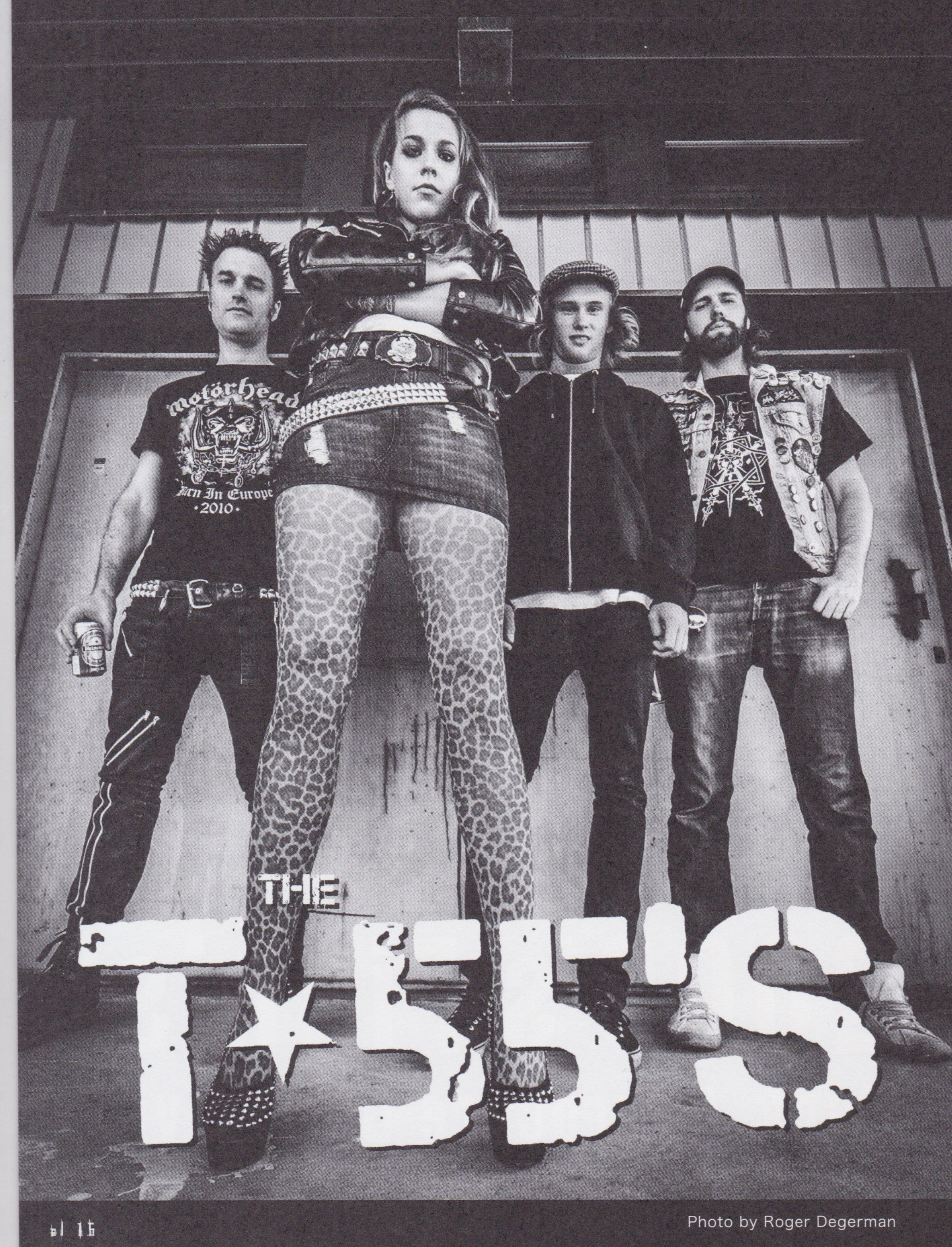


Photo by Roger Degerman

vol.13の表紙を飾ったUmeåハードコア・シーンのオールスター・バンドAC4…解散!!
しかしッ!輪廻転生・永劫回帰、バンドが消える一方で生まれるバンドもあるわけで、AC4/THE VECTORSギタリストのKarlが新たに始動させた女性ヴォーカル・ハードコア・バンド、THE T-55'Sが早くも5曲入り12"EP「Power Up」をリリースしています。
AC4の楽曲を主に手掛けていた永遠のパンク・キッズKarlのバンドですから、曲調はかなりAC4に近いものがあります。ただ、一種の完成形にまで到達していたAC4と比べると、どうしてもこのバンドは発展途中でアラも目立ちます。
それでも、「過去に一緒にプレイしたことのあるUmeåハードコア・バンドの人間と、また新たにバンドを始めるってことだけはしたくなかったんだ。過去の焼き増しではなく、新しい何かをやりたかった」と本インタヴュー中でも語っているように、"いつものメンツでなぁなぁ"になるのを拒み、40歳を過ぎて心機一転チャレンジするKarl及びこのバンドに、僕は多大なる魅力と可能性を感じずにはいられません。
メンバー全員がメチャクチャ丁寧にインタヴューに応じてくれました!

■まずはAC4とTHE VECTORSの現状について聞かせてもらえますか?

Karl「多分、君もすでに知っているだろうけどAC4は解散したんだ。もう続けることが不可能になってね。Dennisは自分のポップ・バンドINVSNに没頭しているし、Jensには2人の子供と妻がいるから、もうどんなバンドでもツアーには出ないと決心したみたいだ。Christofferはまだハードコアをやりたがっているけど、あいつはストックホルムに住んでいる。だから俺は一から新しいメンバーを探して新しいバンドを始めなくちゃならなくなったわけだ。そしてその結果がTHE T-55'Sだよ。Christofferも新しいバンドを始めてくれたらいいな。あいつの昔のバンド、D.S.-13は再結成ギグをTHE T-55'Sと一緒にUmeåでやるんだ。あのバンドのドラマー、Jonasの40歳のバースデイ・パーティも兼ねて4月1日にね。
AC4では一度だけ、昨年の12月に最後となるお別れのギグをやったけど、今やもう終わった話しさ。Ny Vågからリリースされる『Umeå Hardcore』コンピレーションLPのために2曲レコーディングしてあるんだが、Dennisがまだヴォーカルを入れていない状態さ。そのコンピにはTHE T-55'Sも2曲参加する予定で、他にもクールなバンド、INSTÄNGD、U.X. VILEHEADS、BAD NERVE、SÄNKTが参加するよ。この春にはきっとリリースされるんじゃないかな。
THE VECTORSは2008年以降、一切ギグをやっていないんだ。Pelleがストックホルムに住んでいるからね。フル・サード・アルバムを2005年にレコーディングしたんだけど、録音したテープをスタジオ内でなくしちゃってさ、そのうちの何本かは見つかったから、それは2009年に限定の7インチとしてリリースしたんだ。その後、なくしたテープ全部が発見されたので、何とか発表したいと思っているよ。多分、地元で再結成ギグもいつの日にかやるだろうね。だけど、もうJensはツアーはやりたくないだろうから、問題はそこだよ。俺は過去を振り返ったり、再結成だとかにはそれほど興味がないんだ。過去のバンドでは素晴らしい時を過ごし

た。しかし、永遠に続くものなんてないよね。俺はいつまでも楽しかったあの時を覚えている。そしてそれで十分なのさ。俺が興味あるのは現在起こっていること、そして来週、何が起こるかさ」

■KarlとEliasってどのようにして出会ったんですか?Karlは43歳でEliasは19歳ですよね。かなりの年の差がありますが、気にしちゃいない感じですか?

Lisa「Eliasがバンドにいるのは、彼に純粋な才能がある他に、私たちがこのバンドを長期的な目で見ているからよ。今から40年経っても、ステージに私たちを運んでくれる誰かが必要でしょ。彼はいい奴で頼りになる。そう思うでしょ?」

Karl「ハハハ、このバンドのメンバー全員、俺より全然若いよ。ある程度の年齢になると、昔からの友人のほとんどはパンクを辞めちまうものさ。みんな仕事と家族を持ち、アナーキーとカオスに充ちたロックンロールのライフ・スタイルから離れていく。もし君が諦めずにパンクでい続けたいなら、一緒にやれる若いやつらを見つけなきゃならないぜ。俺は幸運にも見つけることができた、本当にラッキーさ」

Elias「僕はCOMRADE KARMAっていうバンドでベースを弾いていたんだ。それにKRONOSというバンドではドラムを叩いていた。Karlの妹のTuaはCOMRADE KARMAとKRONOS、両方のショーを見たことがあって、それに僕とTuaには共通の友人もいてね、それで同じパーティに行ったりしたんだ。彼女は僕がドラムを叩けることを知っていたから、Karlが新しいバンドを結成しようとしていると知って、僕のことをKarlに話してくれたってわけ。それから僕とKarlで練習し始めたんだ」

Karl「俺たちはある日出会った、そして彼は俺の昔のバンドの曲をいくつか知っていた。だからそれらと"Ace of Spades"をプレイしたまでさ。それから一緒に、俺が作った曲をアレンジしていってね。「Power Up」12"の最初の曲、"Send Your Poor"は初めてスタジオに入った日に作ったんだ」

■Lisaを誘ったのはどうして?

Lisa「バンドのフロントに立ってみないかって、Karlがウイスキーのボトルを持って説得しに来たのよ。彼はMOTÖRHEADとAIRBOURNEのレコードをかけながら、私に歌を歌うよう口説いてきたの。ウイスキーを何杯も飲ませてね。完全な不意打ちだったわ。私たちが初めて会ったのってMOTÖRHEADのコンサートへ行く途中の車内でのことだったんだけど、私たち以外はみんなストレート・エッヂだったこともあって気が合ったのかしら。AC4のフィンランド・ツアーでドライバーを任されたこともあったんだけど、本当とんでもないことをしでかしちゃってね。バーのテーブルに上ることが私はちょっと好きなんだけど、"みんなにウイスキーおごっちゃう!"ってその時思い切り叫んじゃったのよ。運転を頼まれているにも関わらずにね。きっとKarlはそんなところにフロントマンとしての気質を感じたんじゃないのかな。それまで私はバンドなんてやったことがなかったけど、スポットライトの外側にいるのって私は全然好きじゃないから、だから全て理にかなったことなのよ」

Karl「ハハハ、その通り!」

■Karlはその時、女性ヴォーカルを探していたのですか?

Lisa「私はそうは思わないかな?必ずしも女性のヴォーカリストを探していたとはね。この手のバンドでヴォーカルを探している他の人たちとは違って、彼は条件を設けなかったし」

Karl「男女問わず、バンドのフロントに立てるやつを探していたんだ。Lisaは出会った瞬間からクールに見えたし正しいアティテュードを持っていた。

Photo by Anneli Sandberg



俺が興味あるのは現在起こっていること そして来週、何が起こるかさ

だから俺とEliasがバンドを始動させたとき、彼女にやってみないかと訊ねてみたのさ。それでまず最初に飲みに行った。本当の話しだよ。彼女はウイスキーのボトルを1本以上空けちまった。俺たちは精々ビール10杯にジンのボトル半分ってところだったってのにさ。

あの頃、俺は誰であろうと何であろうと大歓迎だった。ただ唯一、過去に一緒にプレイしたことのあるUmeåハードコア・バンドの人間と、また新たにバンドを始めるってことだけはしたくなかった。過去の焼き増しではなく、新しい何かをやりたかったのさ。

一般的に、バンドを新しく始めようってときにアイデアやヴィジョンを詰め込みすぎるのは良くないと俺は考えているんだ。適した人間が集まって一緒にやれば、バンドはそれ自身で良い形へと変貌を遂げていく。結局のところ最も大切なことって、良い音楽をプレイして良い時間を過ごすってことに尽きるからね!」

■Erikはこれまでどんなバンドで活動してきましたか?

Erik「KORRUPTORってスラッシュ・バンドが俺のキャリアの始まりだな。俺たちはTANKARDの影響を受けてて、それからビールの力を知ることになった。次いで知ったのは(※MOTÖRHEADの)Lemmyで、ファストなプレイを彼からは学んだ。そうしてこの2つのイデオロギーを結合させた"ビールを飲んでファストにヤル"ってのが、THE T-55'Sの原理になっているんだよ。

俺はDESOLATION STATE RIOTという別の

女性ヴォーカルのバンドでもプレイしているんだが、それはもっとポスト・ハードコア/メタル・スタイルのバンドだな。最近、いくつか新曲をレコーディングしたんだ。ここでチェックしてみてくれ:www.desolationstateriot.com」

■バンド名をソ連の戦車の名前(T-55)から拝借したのはどうしてですか?

Karl「戦車ってさ、ロックンロールな響きがするよな!T-55は世界で最も多く生産された戦車だし、第二次世界大戦が終わってから造られたってのに、未だに数多くの国で使用されている。まるで戦車のAK-47みたいだ。それに55年というのは偉大なる初期ロックンロールのシングルがリリースされた年でもある。Chuck Berry、Bo Diddley、そしてLittle Richard。彼らの1st 7"がリリースされたのは全てこの年のことだ!」

Erik「ドイツ軍の戦車と比較した場合、T-54/T-55はそれほど強固でもないし、すぐに爆発しちまう印象もある。だけどこいつは俊敏だし、ナチを素晴らしく殺しまくった。だから何だか俺たちと親近感を感じるのさ」

Lisa「バンド名について話していたときに、簡潔で長すぎない、もったいぶった感じのしない名前がいいねってなったのよ。Karlが次の練習の時にT-55'Sを提案してきて、私はすぐに気に入った。だって私は昔のソヴィエトの色々なものに夢中なんだもの。マシンと文学作品が主だけどね。ロシアに成り下がってからのクソは全部大嫌いよ。プーチンなんて鞍を使わないで馬に乗って鞭をふるうか、シャツを脱いでポーズをとっていればいいのよ。民主主義にオシッコをかけるのは止めるべきだと思うけど。彼は一体何に向かって鞭をふるうべきなのかしらね」

■曲作りは主にKarlがやっていますか?

Lisa「KarlはAC4でやるための曲をたくさん書いていたんだけど、それを改良していったのよ。最初に私たちが揃って演奏し始めた当時、私には自由になる時間が全然なくてね、その数ヶ月後くらいからかな、私は歌詞を書くようになった。Karlはリフを作ったりなんやかんやしているけど、私がギターに関して知っていることって、叩き壊すか、クソみたいにバカげた"Nothing Else Matters"(※METALLICA)のイントロを弾くかくらいだし。まぁ、まるでダメよね。EliasとErikもいくつか作曲していたけど、今ではみんなで一緒にやってそれぞれが貢献している感じね」

Elias「Karlが「Power Up」EPに関しては全て作曲しているよ。僕とErikも曲を書いてはいるけどTHE T-55'Sの大部分はKarlによるものさ」

Karl「そうだな、AC4のために書いた大量の曲があったんだが、それを練習することなく俺たちは解散してしまった。THE T-55'Sのメンツが初めて





Photos by Jonas Bjorkholm

揃ったとき、俺たちはそれらの曲をまず演奏したんだ。そしてその数週間後にはレコーディングを行った。そのうちの2曲はLisaが歌詞を書き足したし、ErikとEliasは全ての曲のアレンジを手伝ってくれたよ。そしてそれらは「Power Up」12"、Ny Vågのコンピレーションと LP、アメリカでリリースされる予定のMARY'S KIDSとのスプリットになるってわけだ。今ではバンド・メンバー全員が作曲に貢献しているし、そっちのほうがベターだと思っている。Lisaも歌詞をたくさん書いているところさ。俺が曲を作るとき、それは唐突に起こるんだ。ギターを握っているとリフが生まれ、フレーズとなり、また歌詞へと変化していったりする。曲とは発生するものであって、計画立てて作るものではないんだよね」

Erik「俺は自分の曲にLemmyの真髄を注ぎ込もうとしている。曲作りってのは困難がつきまとうがスピードとキャッチーなリフこそがポイントとなる。最終的にはこう自問自答するのさ、Lemmyならどうする?ってな」

■ところで、皆さんは現在に至るまでどんな音楽を聴いてきましたか?

Erik「ヘヴィ・メタルを聴いて育った。バンドで言うならBLACK SABBATH、METALLICA、MOTÖRHEAD、JUDAS PRIEST、それにSLAYERが俺の音楽的嗜好を形成したんだよ。ドライヴするギター、格好いいリフとヘヴィでファストな音楽だぜ」

Karl「俺が本当に若かった70年代には、父親のレコードを聴いていたよ。多くの子供たちがそうしていたようにね。60年代のロックンロール・バンドと古いブルースのギタリストを聴きながら育ったんだ。Elmore JamesやAlbert Kingとかね。父親はJimi Hendrixの大ファンでもあって、それにEric Claptonも好きだったな。あとはJOHN MAYALL & THE BLUESBREAKERSにCREAM、BLIND FAITHなんかもね。それからSEX PISTOLSとパンクが登場すると俺は夢中になった。80年代には俺はアメリカのバンドよりもUKパンク・バンドを主に聴くようになっていて、70年代後半から80年代初期には素晴らしいバンドがたくさんいたよね。DAMNED、COCKNEY REJECTS、VICE SQUAD、DISORDER、EXPELLED、FALLOUT、RIOT SQUAD、BLITZとかさ。Riot City、No Future、Beat The System、Secret、Anagram、Rot Recordsがリリースした作品はほとんど持っていたよ。それに、無数に存在した無名のレーベル、Endangered MusikやOi! Recordsのリリースもね。俺はMOTÖRHEADの全作品の大ファンでもあって、GUNS 'N ROSES、GIRLSCHOOL、AIRBOURNEといったロックンロールも大好きだ。50年代のオリジナルも好きだし、





Chuck Berryみたいなやつもね」
Elias「僕が8歳だったときに、叔父がDEEP PURPLEのレコードをくれたんだ。それからは、厳密にいえば60年代と70年代のロックンロールにのめり込んでいった。でも僕はありとあらゆる音楽が好きだよ。友人にGONZA-RAってのがいるんだけど、彼はヒップホップの2ndアルバムをリリースしたばかりなんだ。僕はEliott SmithやMORBID ANGELと同じくらいそれをよく聴いているんだ。最近はJIM JONES REVUEとOBLITERATIONSをめちゃくちゃ聴いているよ」
Lisa「私の両親はとある理由から全く音楽を聴かないタイプの人間だった。だけど、週末に父の生家へみんなで行くと、そこには古いレコード・プレイヤーがあってね、BEATLES、Elvis Presley、Aretha Franklinのレコードが残されていたから両親がいない隙に私は聴いていたの。私の初めてのレコードはN.W.Aの「Straight Outta Compton」だった。今でも好きなレコードだけど、ギャングスタ・ラップに対する私の関心はあっという間に薄れてしまったな。そして12歳の頃になると私はたくさんのスケーター、そしてパンク・キッズとつるむようになっていった。とても小さな故郷での話しよ。そうしてSEX PISTOLS、DEAD KENNEDYS、それからスウェーデンのバンド、それこそANTI-CIMEXからRANDYまでって感じで聴くようになった。
1年後、私はRANDYのライヴを見るために、寝室の窓からこっそりと抜け出してUmeå行きのバスに乗った。その時に初めてREFUSEDも見てね、それでUmeåで暮らすんだって決心したの。そして14歳の時に実際、私は引っ越したのよ。その後に学校を辞めた私はしばらくニューヨークへ移って、そこでTHE STOOGES、Patti Smith、Joan



Photo by Roger Degerman

Jett、他にももっと色々とクラシックな作品を聴くようになった。ちょうど今は、ボストン・ハードコアを聴き込んでいるところよ。それからBLACK FLAG、MINOR THREAT、MISFITS、BAD BRAINSなんかもね。私のお気に入りをちょっと挙げるならこんなところかしら。健康に気遣ってLemmyにGIRLSCHOOL、PLASMATICSももちろん合わせて服用中よ」

■Lisaの大好きなヴォーカリストは?

Lisa「BAD BRAINSのH.Rが大好きなの。「ROIR」のブートレグのカセット・テープを持っている友達がいたんだけど、そのテープが聴きたいがために、私は彼をドライブに誘ったくらいよ。あぁ、それにLOVEのArthur Leeはいつだって私の絶対に外せない大好きなヴォーカリストよ。彼のヴォーカルは私を完全に打ちのめす。それにWendy O. Williamsも挙げないわけにはいかないわね。ステージ上の彼女はまるで完全無欠の機甲師団のよう。次のアルバムのジャケットで私は戦車にまたがってみたいんだけど、その撮影のためにロシアに行こうってメンバーと話しているの。Karlは、ロシアにドライブするならビールを持って行けって言っているのよね」

Karl「そうさ、ウクライナでは少なくとも、元軍人のギャングに古い戦車を動かしてもらうには現金とビールが必要なんだ。射撃場でもそうだな。The Wild East(※パンクなソ連映画)さ」

■1st EPをJanML Recordsからリリースしたのはどういった経緯で?

Karl「結成したばかりの頃にやったギグのライヴ・ビデオをYoutubeにアップしたら、いくつかのレーベルから連絡があったんだ。その頃は始動してから5週間しか経っていなくて、2曲入りのスプリット7"を出すつもりでいた。だけど9曲もできちゃったものだから全曲レコーディングしたんだ。JanMLは、夏とかそのうちなんかじゃなく、今すぐにでも出せる準備が整っているように見えたレーベルだった。だから俺たちはイエスと言ったのさ。彼らは作品の完成度にも気を配ってくれて、かなりのお金と精力を注いでくれた。君も知っての通り180グラムの45回転の12"で、レコードの裏側には戦車がスクリーン・プリントされている。33回転の安っぽい7"なんかじゃないんだぜ。高品質の印刷がなされているし、インサートもあるからね」

■チェルノブイリを訪れた後に、KarlはAC4の曲"Burn The World"を書きましたよね。そしてTHE T-55'Sの"Power Up"も同じく原発問題についての曲だと思うのですが、あなたの原発に対する意見を聞かせてもらえますか?

Karl「うん、俺とガールフレンドのJessicaでウクライナ政府の許可を得てプリピャチとチェルノブイリの立ち入り禁止区域の内部に行ったんだ。もちろん当局が付き添っていたけどね。驚くべき、そして非常に奇妙な場所だったよ。まさに地獄郷さ。"Power Up"は原子力についてというよりも、政治家がいかにして自分たちの重大な失策を隠蔽するかについてなんだ。古い石棺が崩壊する前にチェルノブイリ4号機を覆う新たな石棺を建設しようとしたところで、核廃棄物は露出してしまっている。もう避けられないことなんだ。もしも、という話しではなく、廃棄物はドニエプル川を汚染し何百万人もの人たちは避難しなければならなくなるだろう。

俺は福島に行ったことはないし、もちろん違う問題でもある。だけど結局のところ全て同じなんだ。どこであろうとも、いつであろうとも。問題を直視する代わりに、政治家は嘘をついて自分は救われようとする。奴らが正直であれば人々は死ぬ必要はなかったのさ」

Lisa「原子力は人類が大局を見誤った結果の一

つだと思う。人はそれを"クリーン"なエネルギーと呼ぶけど馬鹿げている。廃棄物を作り出すものをクリーンだなんて言えないわ。死や病気、突然変異を招き、半減するのに途方もない年月がかかるのに"クリーン"なんてね。そして、あなたたちが痛いほどに知っている安全性の問題もある。過去にはトリウム炉(liquid fluoride thorium reactors)も選択肢として挙げられていたし、そちらのほうが遥かに安全だった。ウランよりもトリウムのほうが地殻で豊富に採取できるしね。だけど、現代の原子炉設備のように、兵器級プルトニウムを生産しないという理由で試験は中止させられた。参っちゃうわよね?お金さえ絡まなければ、私たちはすでに本物の持続可能エネルギーを得ていたのよ。ウンザリだわ」

■では、THE T-55'Sの譲れない信条とは?

Elias「良い音楽をプレイして楽しむってだけだね!」

Lisa「一つのモットーの元に、私たちが団結しているとは思わないわよね?私は平等の権利を信じているし、少数の利益のために多くの人々の生活が支配されるという資本主義が蔓延るこの世界の現実と対峙している。私たちが暮らしているような国々では、人々は自分たちが世界の特権的な小グループに属していることを忘れてしまっているわ。そしてそのグループの中でも絶対的な特権を持つ少数派はくだらないことにやっきになっている。私たちは誰もが不幸せなのよ。常に隣の芝生は青く見えているからね。

その昔、パンクとハードコアは闘争のための手段であった。資本主義社会の教義に対抗する方法だったのよ。だけど、どんどんと推進力は失われていった。今でも人々は"本当の"怒りの声を上げているけど、私の目にはスウェーデンの中流階級の子供たちによるファンタジーにしか見えない。私たちは特権階級であるということを認識しなければ、この世界と対峙することはできない。住む家に教育、医療、食事、それらは特権ではなく、誰もが有する権利なのよ。そう私は信じている。私の友人たちが共闘してくれるならば、私たちは地獄のサウンド・トラックを用意するわ」

Karl「そうだな、バンドとして、世界を変えるために音楽をプレイしているなんてうそぶくのはバカバカしいことさ。そんなことをするバンドもいやしないだろう。だけど、俺たちは政治家のおぞましい行いについて歌っている。俺たちが抱えている問題は明らかに音楽の範疇外にある。

この世界のありとあらゆる良いことも悪いことも、全て人間によって創り出されている。極僅かな人間がどうこうしたってどうなるものでもない。俺たちは皆、自分たちの指導者たちにムカついているし、いつも奴らに対する不満を漏らしている。しかし何らかの理由により、俺たちは奴らを継続させている。俺たちが止めないから、奴らは身の毛もよだつ判断をし続けている。結局のところ、俺たち全員に責任があるんだよ」

■KarlにはAC4のインタヴューのときに聞きましたが、今のUmeåのパンク・シーンについては皆さんどう思っていますか?

Elias「グレートだと思うよ。最高のバンドがたくさんいるからね!」

Lisa「Umeåは大好き。主に音楽シーンにおいてね。だって、前述したように私が最初にここに引っ越して来た理由が音楽だったのだから。正直に言えば、今のシーンは、ティーンエイジの女の子だった私の心を射抜いた程のトキメキはないわね。それって私が大人になったってことだし、女嫌いの奴らにもウンザリしちゃったからだと思う。私がここに引っ越して来た時、UÅHCは確かな評価を世界から得ていた。そして私はそれに関わることができてとても嬉しかったの。私がアメリカに移住し



ていた時、Umeåは音楽的に最悪の状況にあったんだけど、そのおかげで新世代のキッズたちが自分たちのシーンを新たに創ろうとしたんだと思う。クラシックなパンクやハードコア・バンドから影響を受けていたオールドスクールなシーンとは別のシーンをね。
近頃は新しいバンドや音楽に対してみんなポジティヴで献身的であるように思える。だけど、時々、建設的な批判も少しは耳にするわね。この街には本当に素晴らしい才能を持った人たちがいるし、Umeåには更に飛躍する可能性がある。私たちに必要なのはもうあとほんの少しだけ、殻を破ることだけなのよ」
■今後の予定を聞かせてください。
Karl「そうだな、「Power Up」EPのプロモーションをして地元でのショーをいくつかやる。そしてTHE T-55'SとMARY'S KIDSのスプリット7"を来月にAM Vinylからリリースする。チェックしてくれよな!日本のアーティスト、Masaya Nomuraがカヴァー・アートワークをやってくれているんだ。それから初となるヨーロッパ・ツアーを5月に敢行して、その後に1stアルバムのレコーディングにとりかかると思う。そしてもっとツアーをやるかな。俺たちは四六時中、新曲の作成にとりかかっているからね」
Lisa「ちょうど今、5月にあるドイツへのツアーのドライバーを引き受けてくれる勇敢な人物を探しているところよ!」
Erik「いつの日か日本へツアーできたら最高だぜ!」
■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後に読者にメッセージを。
Elias「ビールを飲もうぜ」
Erik「インタヴューしてくれてありがとな!日本には数多くの素晴らしいパンク・マニアックスによる強固なシーンが存在している。その素晴らしさをキープしてくれよ。ビール飲んでファストにかっ飛ばせ!」
Lisa「Mina-san,konnichiwa!すぐにでもみんなに会いたいわ!」
Karl「俺たちのオフィシャルfacebookページをチェックしてくれ:facebook.com/thet55s。ジャパン・ツアーをやりたいな!呼んでくれれば飛んでいくぜ」

今もっとも熱く燃えたぎる土地、ニューヨーク。様々な人種が入り乱れ、取り付く島がない喧騒の街でハードコア・パンクに身を捧げ生きる若きパンクス。昨春、そんな彼等が企画するNEW YORK'S ALRIGHTというフェスティヴァルに日本からはSTAGNATIONを招聘。ベースのMIKEは働きたくない仕事をせっせとこなし、大好きなSTAGNATIONを呼び寄せた。もう、この時点でSAD BOYSのジャパン・ツアーは満場一致で決定したのだった。そして、もう一つ大好きだと言う今乗りに乗るRAW DISTRACTIONSも加えた2週間の全国行脚。RAW、NOISE、DRUNK and POGO！全バンド/メンバー、フル・ドランカーの地獄の様なこの瞬間は間違いなく、新たなる扉を開く一歩になる事だろう。伸るか反るか、答えは単純明快。今を生きる全てのパンクスに捧ぐ！

(So/HARDCORE SURVIVES)

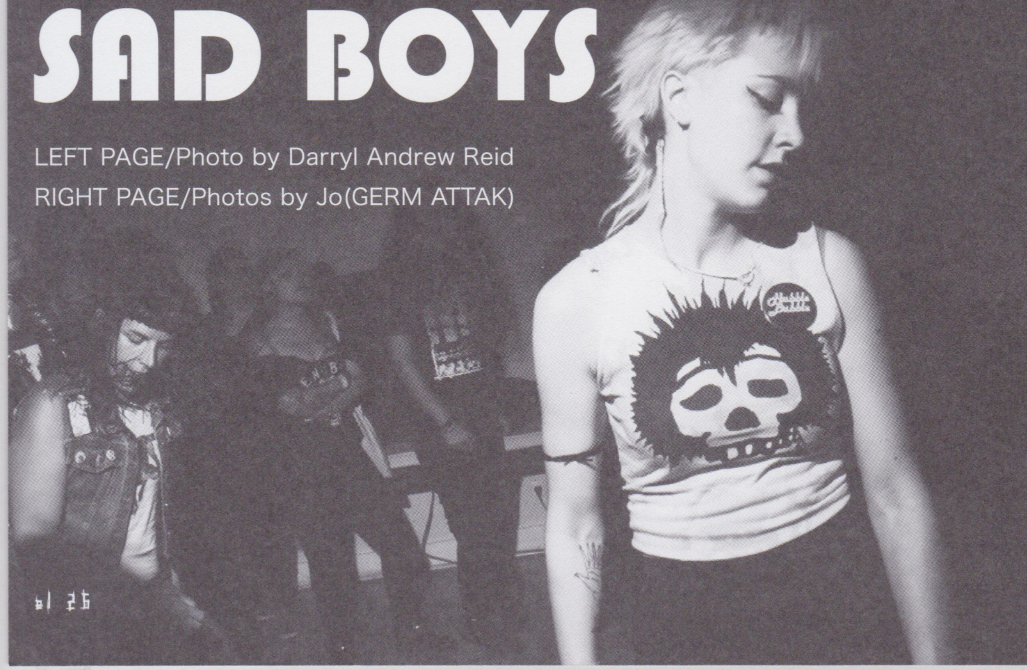
land of the crying sun japan tour 2014'!

SAD BOYS(NYC/USA)/RAW DISTRACTIONS/STAGNATION

5月17日(土)東京EARTH DOM(w/RAW DISTRACTIONS/STAGNATION)　18日(日)名古屋RED DRAGON(w/RAW DISTRACTIONS)　19日(月)神戸108(w/RAW DISTRACTIONS)　20日(火)沖縄CLUB FUJIYAMA(w/RAW DISTRACTIONS)　23日(金)長崎STUDIO RAJA(w/STAGNATION)　24日(土)博多KEITH FLACK(w/STAGNATION)　25日(日)広島AGIT(w/RAW DISTRACTIONS)　26日(月)津山K2(w/RAW DISTRACTIONS)　28日(水)大阪KINGCOBRA SQUAT(w/STAGNATION)　29日(木)四日市VORTEX(w/RAW DISTRACTIONS)　30日(金)福島SOUND STUDIO IVI(w/STAGNATION)　31日(土)仙台BIRDLAND(w/RAW DISTRACTIONS/STAGNATION)
6月1日(日)東京ANTIKNOCK(w/RAW DISTRACTIONS/STAGNATION)

SAD BOYS

LEFT PAGE/Photo by Darryl Andrew Reid
RIGHT PAGE/Photos by Jo(GERM ATTAK)

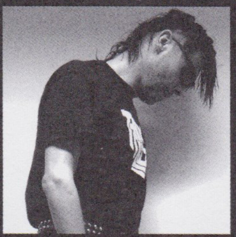


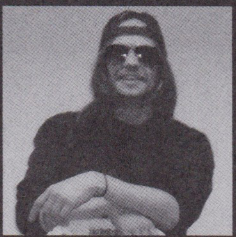



sunn
coliseum keyboard







Thisclose

2012年に彗星の如く現われた、スコティッシュ・ハードコア・シーンのベテラン勢による"Grave New Beat"バンド・THISCLOSE!完全に"GNW"な地獄のハイトーン・シャウトでしかもこのバンド名。世界中のDisマニアたちの間で(多分)話題騒然となった彼らの秘密を探るべく、ヴォーカルのRodneyにインタヴューを試みました!
"Calの遺産"、"CalのDISCHARGE"という言葉を連発していて、「どんだけCalが好きなの?!」と突っ込まずにはいられませんが、MOBSPROOF vol.9に掲載のインタヴューでも同様に"Calの遺産～"と言ってて、そのブレなき姿勢・偏愛っぷりには最早畏敬の念を抱かずにはいられません。"Dis"とか"Grave～"どうこうを超越して、単なるCalオタクな気もしてきました。

■まずはメンバーの経歴を聞かせてください。DISAFFECT、SCATHAなどで活動していたメンバーもいるみたいですが、事実ですか?
「ハロー、ケンジ。el zineに掲載されるなんて光栄だよ!君の最初の質問に答える前に、日本のパンク・メディアのジャーナリスティックな追求から逃れる術はないと、まずは言っておかないとならないね!そして、その通りさ、過去・現在・未来のTHISCLOSEのメンバーはDISAFFECT、SCATHA、QAURANTINE、OI POLLOI、HEALTH HAZARD、BLOODSHOT、RUINといった古風なハードコア・グループでプレイしていたよ。しかし所詮、過去は過去でしかない。THISCLOSEはCalのDISCHARGEを受け継いだフューチャー・サウンドなんだ。The New Wave of the Grave New Beatさ」
■THISCLOSEの結成は2012年ですか?結成の経緯を聞かせてください。所謂、"初期DISCHARGE"スタイルのバンドは世界中にたくさんいますが、FINAL BOMBSのような"Grave New World"スタイルのバンドは少ないですよね。どうしてTHISCLOSEはこのスタイルを選んだのでしょう?
「THISCLOSEは2012年にプロジェクト・バンドとして始めたんだ。友達のために、CalのDISCHARGEのスタイルで音楽をやろうと思ってね。何回かギグをやった後のことなんだけど、俺たちのセルフ・タイトルLPに対して、世界中のパンク・シ

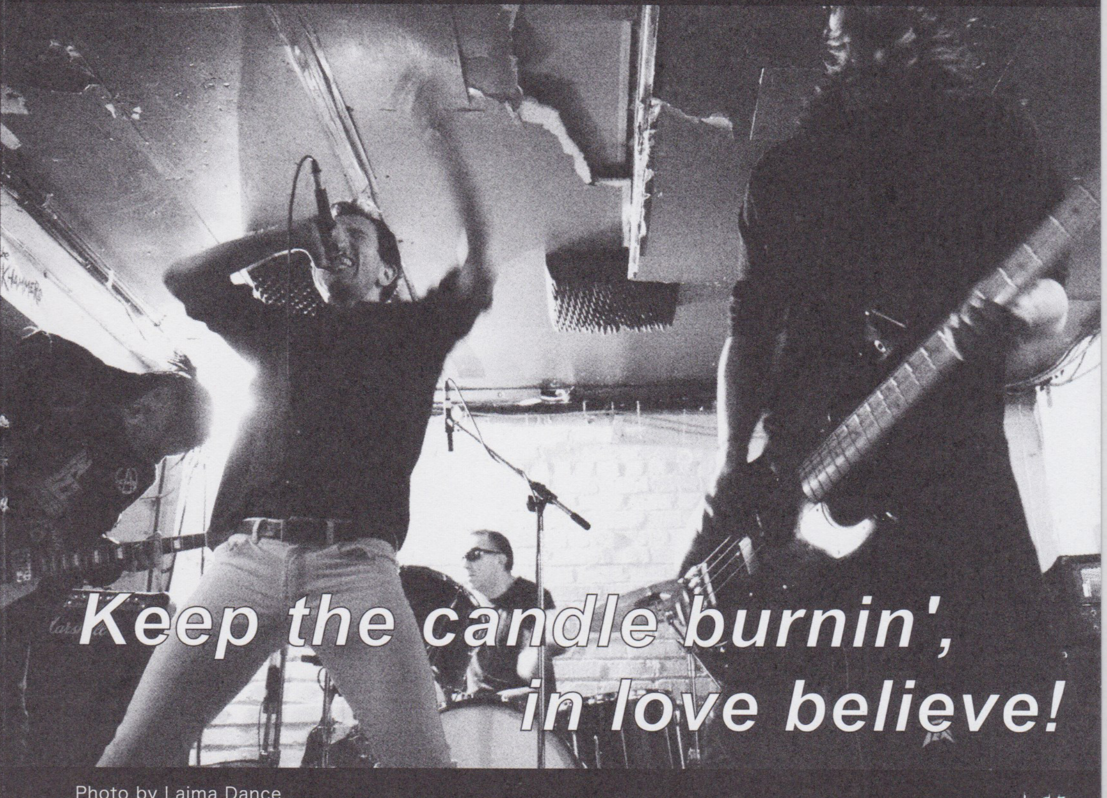
ーンからすごくポジティヴな反応があったんだ。それで俺たちはこのバンドをもっと真剣にやることにした。何人かのオリジナル・メンバーは、ギグや週末のレコーディング・スタジオに専念することができなくなったので、ちょっとしたメンバー・チェンジを経てね。

俺たちがどうして"Grave New World"スタイルをプレイしているのかという質問についてだけど、リスナーにはもう一度、俺たちの作品をじっくり聴き返してもらいたい。うん、たしかに"GNW"期のハイトーン・ヴォーカルだけど、THISCLOSEの音楽は、CalのDISCHARGEの全ての時期、初期の7"から2002年のセルフ・タイトルLPまで、の影響を表現している。俺たちは自分自身のことを、CalのDISCHARGE、その全作品の熱心な信奉者だと思っているんだよ。そして自分たちのフィルターを通して、その影響を取り込もうとしている。彼らの全ての過去作品を用いて、新たにエキサイティングな音楽を創り上げるってわけだ。

FINAL BOMBSは素晴らしいバンドだよね。CalのDISCHARGEの影響下にあるソング・ライティングについて、いつの日か話し合ったり、お互いのアプローチの仕方とかを比較できたら光栄だな」

■THISCLOSEというバンド名はDISCLOSEへのオマージュなんでしょうか?川上さんは生前に世界中のパンクスとコンタクトを取っていましたが、あなたも彼と接触したりしていましたか?

「THISCLOSEという名前には2つの意味があるんだ。1つ目は君の言う通り、川上のDISCLOSEに対してのオマージュ。DISCLOSEとは全然似て



Keep the candle burnin',
in love believe!

Photo by Laima Dance



いないスタイルだけど、俺たちはCalのDISCHARGEを受け継ぐ者として、DISCLOSEと同じ献身を表現したいんだ。それはDISCLOSEという素晴らしいバンドが、作品を通して示したことでもあるからね。2つ目の意味は、俺たちはDISCHARGEとは知り合いじゃないけど、俺たちのサウンドは彼らのサウンドに"this close(※近い)"からさ!
ここスコットランドに暮らすパンクスで川上と連絡を取り合っていた奴はいたけど、残念ながら、俺たちは彼と個人的にコンタクトを取ったことはないんだ。ただ、彼のDISCHARGEに対する献身はスコットランドの古くからのパンク、ハードコア・ファンの間でも伝説になっているよ」

■日本語タイトルの曲で、"ヘッジを引き裂く"というのがありますね。それと、"ありがとう日本"とプリントされた小さなフライヤーが音源に入っていました。これらはどういう意味ですか?

「俺たちのデビューLPに収録した"ヘッジを引き裂く"という曲は、BROKEN BRAINSというスコットランドのバンドのカヴァー曲なんだ。もっとG.I.S.M.みたいなスタイルのハードコアをプレイしていたバンドでね。音源を残す前に解散してしまったんだけど、俺たちはあいつらが大好きだったからこの曲をカヴァーしたのさ。それが、他の曲と比べてこの曲がちょっと違っている(特にヴォーカルがね)理由だよ。良い知らせもあるんだ。俺たちのデビューLPが好評だったこともあって、BROKEN BRAINSは2014年に再結成してEPをレコーディングするみたいなんだよ。
"ありがとう日本"フライヤーは「Fear and Terror」EPに入れたんだけど、それは俺たちをサポートしてくれている日本のファンに対して感謝と敬愛を伝えるためのものなのさ。これまでの俺たちのレコードのほとんどは日本で売れている。だから、俺たちを認めてくれたこと、そしてサポートしてくれていることに対する感謝を伝えたかったんだ。Arigatou Nippon!」

■THISCLOSEはその音楽だけではなく、DISCHARGEのオマージュとしてアートワークや写真などにも拘ってますよね。こういったアイデアは誰のものなんですか?

「アイルランドのアーティスト、Sean Fitzgeraldとコラボレーションできたという幸運に恵まれたんだ。俺たちのアートワーク、その全ては彼がやってくれたんだよ。そして君も気づいたように、DISCHARGEの遺産に対して、彼は細部にいたるまで考慮したうえでユニークな解釈も加えてくれている。俺たちのレコードやマーチャンダイズが際立つようにね。Seanの作品を是非チェックしてみてくれよ。彼のウェブサイトは:
http://sfitzgerald-art.tumblr.com/だよ。
俺たちの写真やグラフィック・デザインは全部バンド・メンバーが担当しているんだ。CalのDISCH

ARGEに対する俺たちの愛情はその音楽に限ったものではないから、細部にまで拘ることはとても自然なことさ。俺たちの音楽をヴィジュアルで表現することにもそれはつながるからね。俺たちのYoutubeチャンネル:
www.youtube.com/thisclosetvで見ることができるミュージック・ビデオを作るときも、同じように拘ったよ」

■2012年から2013年にかけての短期間で、たくさんのリリースがあったように思うのですが。OUR FUTUREというのは自主レーベルですか?

「バンドを始めた最初の年に、LPと2枚の7インチをリリースしたんだ。俺たちにしてみれば多いってほどじゃないんだけど、これらのレコードはみんなからの要望に応じるため、すでに何度か再発されている。だから大量にリリースしているような印象を与えているんじゃないかな。だけど、確かに俺たちはライヴ・パフォーマンスよりもスタジオ作業のほうに集中力を注いでいるってのは間違いないよ。それが、コンスタントに新しい作品をリリースする流れに繋がっているんだ。2014年には新しいLPと2枚以上の7"EPをリリースするつもりでいるからね。

OUR FUTUREは"Grave New Beat"サウンドに熱中してくれている友人たちが運営しているレーベルで、このサウンドでバンドが活動しやすいように協力してくれている。これまでにレーベルとしては1枚の7"をリリースしていて、CDも共同リリースした。あと、彼らはDISCHARGEスタイルだけど俺たちとは別のアプローチをしているバンドのリリースも手掛けようとしていて、オムニバスLPも計画しているんだ。このオムニバスには俺たちも何曲か提供するつもりだよ」

■昔、初めて『Grave New World』を聴いたとき、僕は"なんだこの高音ヴォーカルは?!これがDISCHARGE?"とものすごく驚きました。当時は完全に理解不能でしたが、あなたは初めて『Grave New World』を聴いたとき、どう感じましたか?

「みんなそれぞれに初めて『Grave New World』を聴いたときのストーリーがある。それは俺たちも例外ではないよ。メンバーの何人かは、『Grave New World』が初めてリリースされたその当時を思い出すような年寄りもいれば、90年代にコンピレーション『1980 - 1986』の中古盤で初めて触れたって奴もいる。俺たちの当初の反応は、君のものとそれほどの違いはないかな。いきなりのスタイル・チェンジだったから、本当にリスナーを驚かしたし注目もされたよね。これがパンクかよ!ってさ。時を経て、このLPの素晴らしい音楽性とその歌詞、Calが書いた他の歌詞と同等か、少し劣るかもしれないけど、が再評価されたよね。『Grave New World』はCalのDISCHARGEが遺した、とても重要なパートさ。だけど、もう一度言っておきたいのは、俺たちにインスピレーションを与えてくれた作品は、これだけじゃないってことだ」

■今のDISCHARGEはどうなんですか?どのDISCHARGEのレコードが一番好きですか?

「CalのDISCHARGEが遺したものにしか興味がないんだ。だから最近のDISCHARGEについては、言うべきことは何もないってこと以外に、俺たちはコメントすべきではないね。けど、BonesとRainy、そして彼らが手掛けた素晴らしい音楽はリスペクトしているよ。どのDISCHARGEのレコードが一番好きかって?その質問には回答不可能だ!」

■では、お気に入りのDisコア/D-Beatバンドを教えて下さい。

「もちろん、DISCLOSEやTOTALITÄR、AVSK

UM、そしてFRAMTIDといった伝説的なバンドはリスペクトしている。だけど、俺たちと同じくらいのキャリアのバンドでも、興奮させてくれるバンドはいるね。韓国のSCUMRAID、シンガポールのLIFE LOCK、スコットランドのFAIRYTALE、そしてイングランドのSKIPLICKERS。大切なことは、DISCHARGEの影響下で演奏することの意味をバンドが認識しているかどうかということさ」

■最近のスコットランドのハードコア・シーンはいかがですか?

「スコットランドのハードコア・シーンは小さいながらも活動的だよ。たくさんのバンドがそれぞれに異なったジャンルで活動している。オススメしたいのは、SUFFERINFUCK(グラインド)、FILTHPACT(クラスト)、VUIL(80'sブラックメタル)、BLACK COP(ハードコア)、MERICK(クラスト)、FAIRYTALE(DISCHARGEスタイル)、FUCK!(ハードコア)、HEADLESS KROSS(サイケ・ハードコア・ドゥーム)」

■ところで、スコットランドの独立に関する住民投票が2014年に行なわれますよね。スコットランドの独立についてはどう考えていますか?

「スコットランドは独立するかもしれないし、しないかもしれない。独立に関して主だった議論となっているのは、スコットランドの人々が、自分たちの生活を自分たちでコントロールしやすくなるか、ということ。しかし、政府が大企業に押し切られる形になれば、スコットランドの独立が急激に進められることはないだろうね。

スコットランドでは注目度の高い政治的問題だから、みんな湧き立っているし、俺たちもこの住民投票には行くつもりだよ。今回の投票によって、何かが実際に変わるだろうからね」

■では、今後の予定を聞かせてください。

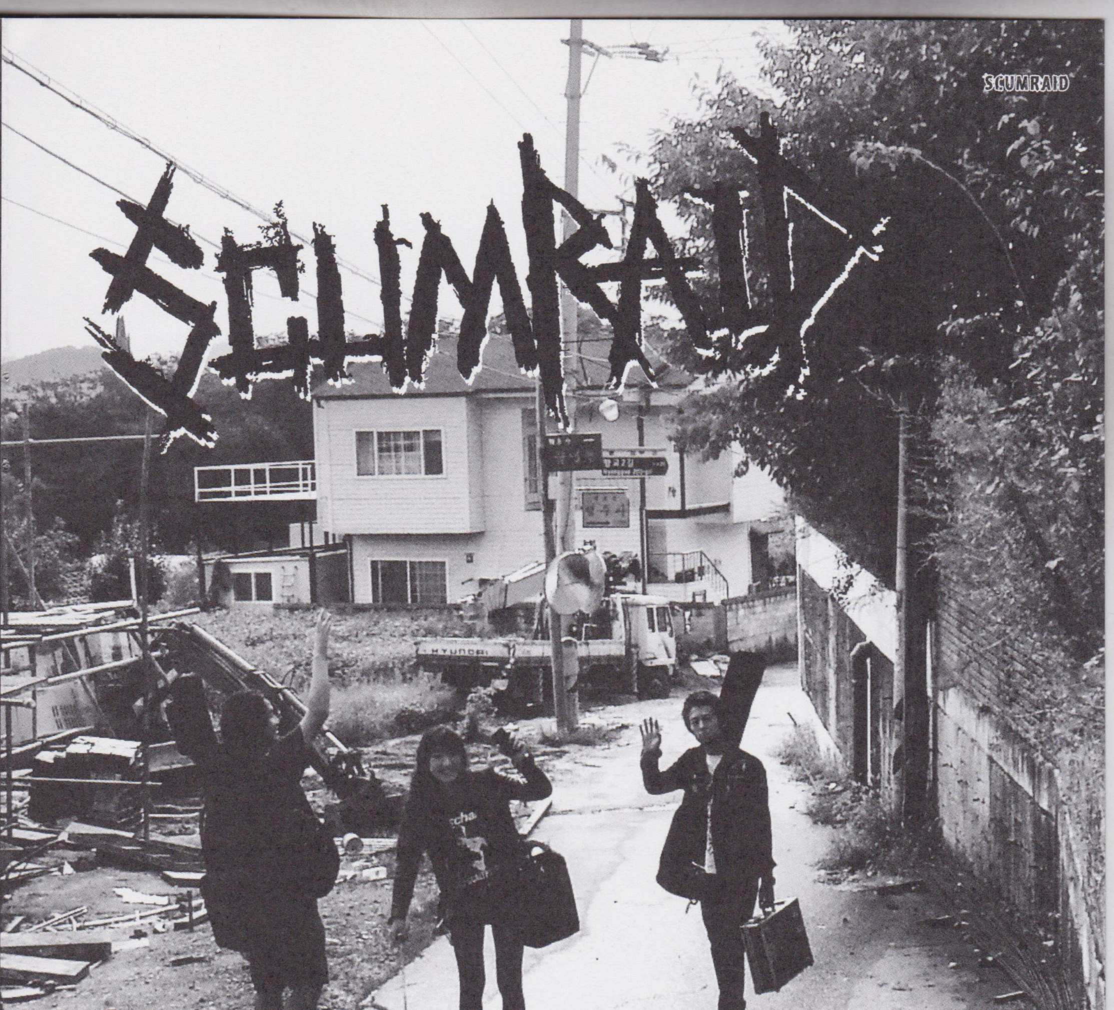
「前述したように、2014年にはより多くのリリースを計画している。どのリリースも準備が整い次第、Answer、Base、Boy、Punk And Destroyといったレコード・ショップに入荷すると思う。それと短いUKツアーも、俺たちの2nd LP『One Foot In The Grave』のプロモーションのためにするつもりなんだ。いくつかパンク・フェスへの出演も予定している。

2015年には日本に行ってギグをやりたいと切実に願っているよ。だから誰か日本のパンクスで、ライヴの企画や俺たちのレコードの日本盤を出すのに協力してくれる人がいたら、ぜひ連絡をしてくれよな」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後に読者にメッセージを。

「インタヴューしてくれてありがとう!日本のみんな、THISCLOSEへの継続的な支持だけではなく、君たちのDISCHARGEの遺産に対する絶対的な愛情に対しても、再度感謝の意を伝えたい。Keep the candle burnin', in love believe!」





ポゴ・パンクやスキンズ、ニュースクール等のバンドが韓国にいることは知っていたのですが、←前頁のTHISCLOSEインタヴューで、"お気に入りのDisコア/D-Beatバンドは?"の問いに、韓国のSCUMRAIDの名前が挙げられており、勉強不足の僕は、"韓国にD-Beatバンドっているの?!"と大変に驚いた次第です。

とにもかくにもキーボードをブッ叩いて調べてみると確かにいます、SCUMRAID。日本のバンドを韓国に招聘したりもしているみたいで、早速音源を聴いてみますとこれが再び驚かされる滅茶苦茶にノイジーな混沌難聴大虐殺的サウンド!こいつはインタヴューするっきゃない!といきり立ったわけで、ギター・ヴォーカルのJihwan、ベースのDongwoo、そして紅一点ドラムのJuyoungに話しを伺いました(無記名の回答はバンドとしての答えです)。

ちなみに"なんでTHISCLOSEのRodneyがSCUMRAIDのことを知っているのか?"というと、彼が別にやっているXSAXONXというバンドとSCUMRAIDは、マレーシアとシンガポールで対バンしたことがあるみたいです。世界って狭いですね〜。

■パンクに興味を抱くようになったのは、いつ、どのように?キッカケとなったのは韓国のバンドでしたか?

Jihwan「僕が17歳だった頃なんて毎日が退屈で仕方なかった。それで海外のロックを聴くようになったんだけど、何を歌っているのか全然分からなかったな。ちょうど同じ時期に、ソウルの90年代のパンク・バンドを知るようになったんだ。すごく攻撃的で暴力的なバンドでね、日本で演奏した時には旭日旗を切り刻んだりしたんだ(彼らは単に怒っていただけで真剣にやったことではなかった)。多くのファンがいたバンドだったけど、政治的に真剣ではなくて、韓国の若者が感じていた社会からの圧迫感を表現していただけだったんだよ。このバンドは僕に、"お前をぶっ壊そうとするものをぶっ壊せ!"と教えてくれたのさ、ハハハ。今じゃ彼らはマヌケなクソみたいなことを歌っていて、もう興味ないよ。僕はもっとたくさんの素晴らしいバンドを知ったからね!」

Juyoung「13歳~14歳の頃に、"do it yourself"って歌っているパンク・バンドをテレビで見たの。子供だった私はものすごく感化されてね、その後にパンクのギグでパンク・ミュージックを聴くようになっていった」

Dongwoo「とあるバンドを聴いて歌詞を読んだ後に、そのバンドと似たようなバンドを聴いて回ったんだ。そしたら、それがパンク/ハードコアだったってわけ」

■SCUMRAIDの結成についても聞かせてください。このSCUMRAID以前にバンドはやっていましたか?

Jihwan「友達の家でJuyoungと出会ったんだ。僕たちはバンドをやりたがってて、幸いにも彼女はドラムを叩けた。そして僕はギターを弾けた。もう話す必要なんてなかったね。すぐに練習のためスタジオを予約したよ。当時はD-Beatパンクどころか、ハードコア・パンク・バンドもそれほどいなかったから、まず僕らはお互いの知っているバンドのコピーから始めたんだ。ANTI-CIMEXにDISARM、DISCHARGE…、他にもずっと練習していたよ。そしてある日、最初のベーシストが加入した。彼はいい演奏をしてくれていたんだけど、もうやりたくないってバンドを辞めちゃってね。そうして遂に現在のベーシストDongwooがバンドに加入したんだ。彼は楽器初心者だったけど、練習を続けていい感じに弾けるようになって、僕らはギグをやったり2012 DEMOをレコーディングした。そしてもうすぐEPをリリースすることになったんだよ!JuyoungとDongwooはこのバンド以前にバンドをやっていたことはないよ。僕はCRIPPLESってバンドをやっていたけどね。ニューウェイブ・パンク・ロックで1年くらいはやっていたかな」

■あなたたちの2012年のデモ・テープは滅茶苦茶ノイジーなクラスト地獄って感じですね。凄いです!作曲時にはどんなことを心掛けていますか?

Jihwan「とにかく全てをぶっ壊したかったんだ、ハハハ。だから極限のノイズ、破壊的D-Beat、地滑りのようなベースってのには気を配ったかな。4トラックのカセット・レコーディング・マシンを使って自分たちで録音したんだけど、その結果として、オールドスクールなサウンドになったんだと思う。今は他のジャンルの要素も混ぜてみようとしているけど、まだサウンドは似たようなものかな。けど、カッティングとスタートを繰り返すスラッシュのコードをやったり、湿った80年代のクラスト・パンクっぽい感じになるよう一番気を使っているね。それと同時に、音楽とメッセージをミックスしようとしている。実際には、ギグの時には何て叫んでいるか分からないけどね、ハハハ。でもギグの時は、怒りがメッセージとして伝わればいいね。表現し

ているのは社会に対する怒りなんだ」

■デモ・テープ以外に音源はありますか?レコードやCDの予定は?

「デモ以外にはリリースはないんだ。だけど今、7インチ・ヴィニールの準備をしているところさ!」

■歌詞についても聞きたいのですが、メイン・テーマは戦争でしょうか?

Jihwan「歌詞では圧力からの解放を歌っているんだ。韓国での僕の日常は順調でもなければ容易でもない。このクソみたいに忌々しいことから感じたことを歌詞にしているんだ。そして、"いかにして生きるか…"ってことや、抵抗する姿勢、朝鮮半島が直面している北朝鮮のことといった僕が脅威を感じた事柄についてもね。だから戦争がバンドとして注力しているメイン・テーマってわけじゃないんだ。このバンドを通して、僕たちが感じたことを伝えようとしているし、"お前をぶっ壊そうとするものをぶっ壊せ!"ってのが動機になっているよ。それとDongwooも時々歌詞を書いているね」

■最近の韓国の政治状況や兵役制度についてはどう思っていますか?

Jihwan「僕は今、兵役中なんだ。兵士ではなく、公益勤務要員としてね。韓国の男性は全員、義務として軍隊に行かなければならない。しかしながら、今じゃ多くの男性は軍隊なんて行きたくないと思っている。義務なんかよりも人生において何が一番大切なのかに気がついたんだよ。2年間国家を守る、なんて単純な話しじゃない。軍隊生活な



(日本と)最も近い国が韓国なんだよ

繋がりがないわけないじゃないか?! こんなにも身近なんだぜ!

安い飛行機代と2時間で到着さ

んてとても閉鎖された環境だし、虐待が内部であったとしても訴え出ることもできやしない。そこに人権はないんだよ。そうして洗脳とトレーニングの2年間を過ごすと(理性なき)愛国の自由市民となって社会に出てくる。軍務とは、全体主義への協力と総奴隷化計画を目的としているのさ。育て上げて吸収するってこと。人間が容易く奴隷みたいなマシンになっちまうなんて、僕は賛成できない。韓国社会において最も否定すべき対象であると僕は思っているよ」

Juyoung「徴兵制度なんて止めるべきよ。兵士は21ヶ月もの間、200,000ウォン以下しか得られないのに、戦争について学ばなければならない。20代前半で軍隊へ無理矢理連れていかれて、若者にとって一番大切な時期に洗脳を強制させられる。酷い話しよ」

Dongwoo「クソだよね…」

■韓国のハードコアについてですが、ロウ・パンクやクラスト・ハードコア・バンドはかなりいるのですか?オススメのバンドはいますか?

「90年代初期から現在に至るまで長く古い歴史があるよ。素晴らしい曲をプレイしていた格好良いバンドがいたんだ。そして次世代である僕たちは過去のバンドよりももっとアクティヴだよ!ライフスタイルとしてパンクを捉えているし、ハードコア・パンク・シーンはアルコールやセックスだけではなく、もっと音楽としてオープンであろうとしている。バンド名を挙げるならばBANRAN(ファストコア)、FIND THE SPOT(80's USハードコア)、KITCHES(ハードコア)、BAMSEOM PIRATES(グラインドコア)、NAHU(グラインドコア)、THE COUCH(ポゴ)…他にもね!!」

■韓国と日本のハードコア・シーンの関係性についてはどう思っていますか?

Jihwan「最も近い国が韓国なんだよ。だから僕はこう考えている。"繋がりがないわけないじゃないか?!こんなにも身近なんだぜ!"ってね。安い飛行機代と2時間で到着さ。僕はJuyoungが毎年企画しているTHE MORE I SEEが大好きでね!ここにいくつものバンドがツアーに来ているんだ



よ。韓国のシーンはオープンだ、もっと共有したいね！」

Juyoung「良くなっていると思うわ！最近では多くの繋がりができている。VIVISICKとCRUCIAL SECTIONはBANRANの企画でツアーに来てくれたし、2年前には多くの友人の協力もあってFOLKEIIS、SYSTEM FUCKER、LASTLYが私のフォト・ブック(THE MORE I SEE)企画のショーに出てくれた。今年は名古屋のバンドをもっと呼ぶつもりよ」

Dongwoo「どんどん良くなっていると僕も思うよ。だけどもっと親しくなってより良い関係性を築ければ、お互いのシーンが抱えている問題についてもより深く留意できると思うんだ。韓国のシーンでもいくつか論争になっている事柄があるからさ」

■最近のお気に入りのバンドは？

Jihwan「スウェーデンのMASSHYSTERIはものすごくいいよね!!!それとテキサスのTOLARはラフでかなり獰猛なハードコア・パンクをやっているよね。大好きなんだ。それとシンガポールのSNÄGG TOOTHはmotörchargeな感じだね!!!彼らのギグじゃダイブしてたよ。楽しかった」

Juyoung「THE BLUE HEARTSは私のアイドルよ!!それと大阪に行ったときにJACKYがオススメしてくれたMASS GENOCIDEの7"。どれだけ聴いたか分からないほど聴きまくってる！」

Dongwoo「今週聴きまくった音楽は、DOOM、テレサ・テン、日本のBLACK CATS。最高さ」

■皆さんは働いていますか？それとも学生ですか？日常生活についても知りたいです。

Jihwan「公益勤務要員として市役所で働いている。クソッタレ。あとは牛乳配達の仕事も夜明け頃にやっているんだ。週末には友達と過ごしたりバンド練習をしているよ」

Juyoung「ファッションの広告代理店でグラフィ



ック・デザインの仕事をしているんだけど、最近になって不条理なことを押しつけられたから、辞める準備をしているところ。だから無職になるわね」

Dongwoo「映画やビデオのディレクターをやっているんだ。最近は『うる星やつら』の漫画本を読んでいるよ」

■今後の予定は？

Jihwan「東南アジアからヨーロッパまでを自転車で行くツアーに出たいよ」

Juyoung「世界中パンクの旅をしたい!!!」

Dongwoo「『うる星やつら』を読み終わることかな」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。読者にメッセージをお願いできますか？

Jihwan「ジャパン・ツアーをやりたい！そこで会おうね!!」

Juyoung「インタヴューしてくれてありがとう。私はよくギグを見に日本へ行っているの！日本のみんなこんにちは!(^ω^)　いつか日本でギグをやりたいな！バイバイ！」

Dongwoo「(※日本語で)『うる星やつら』のラムちゃん大好きです」

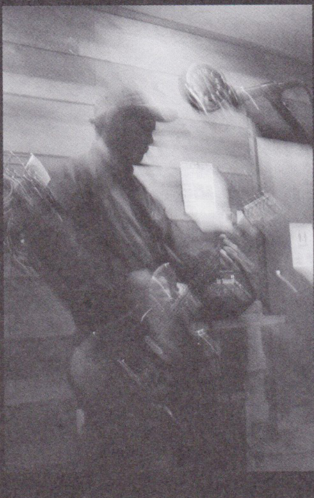
SOW THREAT

2010年結成の沖縄ステンチ・クラスト・コア・バンドSOW THREATが、「demo 2013」カセット・テープ(5曲入り)をリリースしています。
EXTREME NOISE TERRORやDOOM、そして90年代の東京クラスト勢も彷彿とさせる、ピュアに汚れまくった緊迫感漲る爆撃サウンドがとにかく強烈&鮮烈!"作り込まれた嘘っぽさ"のないナチュラルな音の粗さと生々しさも最高なのです。
メンバー全員、ハッチャン(4 strings/brutal&hell)、タムラ(6 strings/noise&shout)、タイシ(2 sticks/speed)に話しを聞きました!

■元々やっていたバンド、BURST HEADをSOW THREATに改名したのが2010年のことだったと思いますが、そもそもどうして改名したのですか?

ハッチャン(H)「えーっと、最初はメンバーも変わったし改名して心機一転始めたつもりだったんですが(笑)、BURST HEADはいわゆる90年代のアメハー(スラッシュやパワー・ヴァイオレンス)や日本のスラッシュ・ハードコア等のサウンドを意識していたんすけど、SOW THREATはソレらと全く趣向やOUTPUTの仕方も違うなと、全く新しい別バンドだなと、やっていく毎に自分の中で確信に変わりましたので別バンドになりますね。
ちなみにBURST HEADは現在凍結中であります(笑)。復活できるならヤりたいですね!」

タイシ(TAI)「バンドに誘われたのも2010年だったと思うんですけど、その頃ハチマンはBURST HEADやってて自分も仕事辞めた頃で一緒によく呑んでて、スタジオに遊びに行ってたんですよね。ギターが墨だらけのニュースクールの人でドラムが今の馬鹿衆ってバンドのメタル・ドラマーで。今より全然ノイズでブラストで、纏まってて(笑)、あ、


カッコイイなって。メンバー変わるからオレ入ったらバンド名変えようかって」

■SOW THREATのサウンドは、EXTREME NOISE TERRORやDOOM、SORE THROATといったUKステンチ・クラストからの影響が色濃いように思いますが、実際のところ始動時にはどんなバンドが念頭にありましたか?

H「結成時からのメンバーが僕とドラムのタイシなんすけど、バンド始める前は僕がタイシと、名古屋のOUT OF TOUCHやC.F.D.L.のようなスラッシーなクラストをやりたいねって話していました。最初はタイシをヴォーカルにしたいなって考えてたんすけど、あいつがヴォーカルは恥ずかしいですって言って(笑)、ヴォーカルよりはドラムやりますよって言って、とりあえず始めた形になりました。当初はギタリストも未だいなかったので、CHAOS UKの曲を2人だけでスタジオ入ってひたすら練習していましたね(笑)」

TAI「クラスト・コアは大好きでそういうのやりたいってのはあったんですけど、最初はC.F.D.L.みたいなサウンドでやろうって話ししてた記憶はあります」

■ハッチャンは過去にBURST HEADだけでなく静岡のDEVOIDでも活動していましたが、タイシさんとタムラさんのこれまでのバンド経歴も聞かせてください。

TAI「最初はヴォーカルやらない?って言われた記憶なんですけど、メタル・ドラマーがアタマから離れなくて。あんなの叩きてーなってドラムで入ってみても全然ドラムやったこと無いし(笑)。ブラストなんてもっと知らないし。バンド初めてです(笑)。基本からやろうつって、最初はDISCLOSEとCHAOS UKをコピーしたんすけど、2 beatもD-beatも叩けなくて崩れて捻くれて今の音になったのかなぁ」

タムラ(TAM)「20代前半の頃は、DAY OF INSANITYというニュースクール/メタルコアなバンドをやっていて、そのバンドが解散して、REASON FOR LIVINGというハードコア・バンドに加入、そのバンドも2年前に解散して、SOW THREATに加入って流れです」

■タムラさんはSOW THREATの3代目のギタリストのようですが、どんな経緯で加入されたのでしょう?

H「前にタムラがREASON FOR LIVINGってニュースクール・ハードコアのバンドでギター弾いていて、僕はBURST HEADの頃から彼らとは対バンしてて、ヴォーカルのコメスも同い年でよく話したりして。たしかタムラとまともに話したのがREASON〜企画のライヴにSOW THREATで出て、打ち上げで映画の話で盛り上がって(笑)。んでREASON〜が解散するってのをコメスから話を聞いて(2012年の秋ぐらいだったかな)。ちょうどその時に僕らギター抜けるのが決まってたんで探してて、以前タムラと話した時に彼がパワー・ヴァイオレンスとかTRAGEDYやHHIG(HIS HERO〜)のレコードとかを好きで聴いてるって話したり、彼が趣味で作ってたMIX CD-Rを貰って聴いて良いなって思って。地元でそういったハードコアやレコードとか音楽の話できる人が少ないから、タイシやコメスにも相談してギターで入れたら面白そうだなって思って口説きました」

TAM「前にやっていたREASON FOR LIVINGの解散と、SOW THREATのギターが抜けるタイミングが重なって、ハチマンからギターの誘いを受けました」

■先日、デモ・テープをリリースしましたが、これが初音源となりますか?昔ながらのやり方と言うか、いきなりレコードやCDじゃなく、「まずはカセット・テープで出そう!」という考えがあったので



しょうか?

H「いえ、音源は過去に2作デモをライヴ限定でリリースしてました。最初がテープで、次がYotaって地元のハードコア・バンドとのSplit CD-R。どれも20～30本ぐらいだったと思います。

今回のデモをテープにした理由はCD-Rだとコンポやデッキによって読み込みでエラーとかになる場合もあるじゃないですか?実際僕の家にあるコンポで聴けなかったりとかたまにあるもんで、なので確実に聴けるフォーマットだとテープが良いかなと思ってテープにしました。

レコードは将来的に出せたら良いなと」

TAI「ガチャ録りのカセットでデモを前に出して、新メンバーでまた出しただけですね」

■歌詞を載せていないですが、"island"という曲はやはり沖縄のことを歌っているのでしょうか?差し支えなければどんな内容か教えて下さい。あと、伏せ字っぽいタイトルの"XXXXXX"の内容も気になります。

H「そうですね、"island"は沖縄の現状(基地問題や馬鹿な政治家について)を歌っています。尖閣や竹島の領土問題も"island"には当てはまりますね。国に翻弄される島。

"XXXXXX"は単純に言えば某首相による政策(アベ●ミ●ス)に対するヘイト・ソングです」

TAI「島の事です」

■"what the truth"はSHITLICKERSの"War System"をちょっと連想したのですが、曲を作る時に意識されましたか?

H「作った後にそういえば似ているなって指摘されて(笑)。作っている時は特に意識していなかったんですけどね」

TAI「はい、"War System"です(笑)」

■レコーディングでこだわったところや苦労した

ところなどがありましたら教えて下さい。程よい粗さ、生々しいロウな感じですごく好みの音質でした。

H「気に入っていただいて有り難うございます。レコーディングはヴォーカルと重ねのギター以外は全部一発録りで、準備や片付けも含めて4時間しないうちにアッサリ終わったので特に苦労っつう苦労は(笑)。でも今回エンジニアは普段ヒップホップとかテクノのトラックを作ったり、録ったりしている友達にヤってもらって、友達もこういうバンド・サウンドの作業は初めてだったみたいでイメージを伝えて何回かやり直しをしたりしてミックスには少し時間をかけていますね。ほの暗い下水道で演奏している感じのイメージでって言ったかな(笑)」

TAI「こだわりも何も無いガチャ録りの時よりは良いのを、くらいです。とても良く編集してくれました(笑)。ありがとうございます」

TAM「僕自身は特に無いです(笑)。レコーディングに協力してくれた、伊藤さんと當山さんがヒップホップ畑の方々なので、そのお二人は苦労したと思います(笑)。感謝してます」

■ちなみに、最近聴いてガツンときた音源は何かありますか?

H「年明けてからパンクあんまり聴いてなくて、BLACK SABBATH聴きなおしてます」

TAI「最近のでは無いですがガツンと来て良く聴いてるのはSCUMBRIGADE(fuck off and die)とKRIMINELA 83です♪」

TAM「HARNESSとDISGRACEのスプリット、HOMETOWN HATEとDENNY CRANEのスプリット、REDOUND、DOS DIAS DE SANGRE、HOAX、COKE BUST、死んだ方がましのデモ」



■すごく漠然とした質問ですが、「沖縄でハードコア・バンドをやるということ」に対して、他の地域とは違う独自性を感じたりしますか?

H「そうですね〜、あくまでも僕一個人の意見として聞いて欲しいのですが、他の都道府県と比較するとこの島の問題って特殊で、それが沢山あって、それも僕らが生まれる前から。自分自身ハードコアだからポリティカルな思考や主張でなければならないっていう変なカテゴライズは無いんですけど、自然とこのバンドでOUTPUTする言葉が自分らの生活の現状のことを伝えようというか、理解してほしいなって思って叫んでいるから、ソレは絶対に他の土地とは違うと思うんですよね。でも僕らの曲、全部が全部そういう歌詞ではないんすけどね(笑)。友達のことについて歌った曲もありますし」

TAI「他を良く知らないので分かりません。する気も無いですが、沖縄沖縄するのはもう少し纏まってからでも良いのかなとも思います。初期衝動です」

■また、最近の沖縄のハードコア・シーンについて思うところがあれば聞かせてください。

H「シーンと言われるようなのは特に無いと思うんすけど(笑)。でも前にDollの時に(5年ちょい前ぐらいかな?)山路さんがインタヴューした時よりもバンドは増えていますよ。

ベテランだとR.A.G.S、ジャパコアだと馬鹿衆とか、アタックな感じのハードコアだとTORICOMYCINとかアメハー・スタイルだとBIRDHELMSとか、あとちょっとハードコアとは違いますけどパンクスの奴らがヤっているiYA BASTARDS!とか。TORICOMYCINは中でもお勧めのバンドなんですがライヴあんまりやんないすよ(笑)」

TAI「同世代に近いパンクスばかりですが同じようなバンド(人間)が居なくて面白いです」

■今後の予定を聞かせてください。ライヴも色々と予定しているみたいですね。

H「5月20日のド平日なんだけど沖縄市にあるFUJIYAMAでNYから来るパンク・バンドSAD BOYSのジャパン・ツアー沖縄編に出るのと、5月31日に東京西荻窪FLAT、その翌日の6月1日には北海道札幌のKLUB COUNTER ACTIONでショート・ツアーやります!東京がNovembre Records企画、北海道がWOLFGANG JAPAN TOUR企画です。近隣の方は是非!そしてビール奢ってください(笑)」

■最後に何か読者にメッセージがあればお願いします。

H「今の日本はおかしな方向にいっとるから偏った考えにばかりとらわれないで、色んなモノの見方をして考え方を見つめ直そう♪」

TAI「この島は葛藤と共存しています。体感しに来て下さい。観光で来てね(笑)」

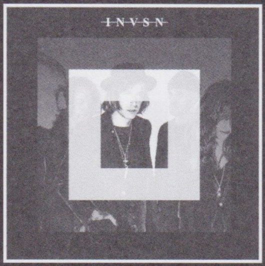
TAM「僕ららしいデモを出しました。チェックしてもらえたら嬉しいです」

2014.5.20(火)CH6ユウ君企画at沖縄市FUJIYAMA w/SAD BOYS(USA.NY),RAW DISTRACTIONS(東京),BIRDHELMS,ショッキング桃色,and more

2014.5.31(土)Novembre Records企画「Full blast Graveyard Vol.2」at東京西荻窪FLAT w/Sun Children Sun,RETURN,Band Of Accuse(福島),and more

2014.6.1(日)WGJT企画「ENDLESS煩脳vol.3」at北海道札幌市KLUB COUNTER ACTION w／WOLFGANG JAPAN TOUR,and more

INVSN 解説



またDennisネタかよ!(…ストーカー?)と言われそうですが、今号のTHE T-55'SインタヴューにおいてギタリストのKarlがAC4解散の理由、その筆頭に「Dennisは自分のポップ・バンドINVSNに没頭している〜」と発言しており、"そのINVSNってどうなの?"と気になっている方も何人かはいらっしゃるでしょうから、ちょっと書かせて下さい。

vol.13でも、もう散々書いているので極力サラッといきますが、INVSNはTHE(INTERNATIONAL) NOISE CONSPIRACY等々のDennisによるソロ・プロジェクト、THE LOST PATROLを端に発しています。そのソロ・プロジェクトがバンド形態になったのを機にTHE LOST PATROL BANDに改名、しかし同名バンドがアメリカにいたのでINVASIONENに改名。更にINVASIONENがINVSNとなり、昨年にはINVSN名義でのセルフ・タイトル・アルバムをリリースするに至ります。

サウンドもコロコロ変わっていまして、THE LOST PATROL BAND時代はパワー・ポップ(キャッチーなパンク・ロック)、INVASIONENも1stアルバム『Hela Världen Brinner』までは同路線、しかしSonyと契約した2ndアルバム『Saker Som Jag Sagt Till Natten』では一転してのニューウェーブ、そして3rdなのか改めての1stなのか…、INVSNの『ST』は何と………ゴス・ロック!

見事なまでにパンク界隈ではシカトされているINVSN及び『ST』ですが、それはメジャー流通でパンク/ハードコア専門店では入荷しづらいということ、そしてもうそのサウンドがパンクの範疇を大幅に逸脱していることが大きいように思えます。『Saker〜』でのニューウェーブ路線は、まぁ、T(I)NCでも多少の要素があったので理解できますが、『ST』でのインダストリアルなゴス〜ダーク・ウェーブ的なサウンドは正直、"洋楽"好きの大学生が裏原宿のカフェで「INVSNってさ、クールだよね。北欧の陰鬱な森の匂いがする、ラララララ♪」って言いそうなイメージが漂っています(※偏見です)。

もちろんDennisらしいメロディーや、ex MASSHYSTERIメンバーも在籍しているだけに、MASSっている(注:"MASSHYSTERIスタイル"の意味)フレーズやコーラスも随所に盛り込まれています。そこだけは興奮しますが…。

さて、KarlはインタヴューでINVSNを"ポップ・バンド"と表現していました。初期INVASIONENを指しての"ポップ"なら分かるのですが、INVSNを1分でも聴いたことがあるなら間違っても"ポップ"とは言わないはずです。うがった見方なのかもしれませんが、そこには"パンク一筋!"の男からDennisに対する皮肉が含まれているような気もしました。音楽としての"ポップ"ではなく、大衆受けを狙ったという意味での"ポップ"だったのでは…と。

Karlはまた、「過去に一緒にプレイしたことのあるUmeåハードコア・バンドの人間と、また新たにバンドを始めるってことだけはしたくなかったんだ」とも発言していますが、これも完全にUmeå人脈の"身内"で固められたINVSNに対する当てつけのような気がするのは、私だけでしょうか?

メジャーもアンダーグラウンドも今更関係ないシーンですし、私も音楽が良ければ立ち位置なんて二の次だとは思います。超メジャーだったREFUSEDにT(I)NC、その一方で前者と比較すれば完全にアンダーなINSTÄNGDやAC4。Dennisはこうして地上・地下を自由に行き来していますが、INVSNは地上志向で行くバンドで、私はその音楽性に戸惑いを隠せないでいる…というお話でございました。



GIUDA
ITALIAN GLAM ROCK

数年前に東京・西新宿の小滝橋通りを歩いていましたら、見知らぬ外国人男性2人組に「Nat Recordsってどこか分かる?」って声をかけられたんですよ。
「もちろん知ってるよー」と、すぐ近くだったので案内したところ、どうやら彼らはイタリアから来日中で、TAXIというバンドをやっているとのこと。僕は、「TAXI?ケッタイなバンド名だなー」と思いつつ、案内を終えて別れたのです。
そんなことがあったなんてスッカリ忘れていた2013年の暮れ、GIUDAというイタリアのグラム・ロック・バンドの音源を購入したら素晴らしく格好良かったので色々と調べていたところ、"GIUDAはTAXIというバンドのメンバーが始めた"との情報が。TAXI??…あの迷子か?!…こうして脳味噌の奥にしまい込まれていた(ものすごくどうでもいい)情報が突如として浮上してきたのです。ハッキリ言って僕はグラムは完全に門外漢ですし、GIUDA自体、イギリスのガーディアン紙やNMEにまで取り上げられているバンドなので、"el zineではどうかなー"と悩んだのですが、このゴキゲンにキャッチーなバブルガム・サウンドは幣誌読者様も十分イケるはず!というわけで、ギターのLorenzoへのインタヴューをお送りします!そして僕と同様に、"グラムってイマイチよく分からないな～"という方は、P47からの大越さんのテキストも併せてお楽しみ下さい。

■GIUDAは元々TAXIのメンバーが始めたバンドなんですよね?

「Tenda(ヴォーカル)とDanilo(ベース)、そして俺で長年一緒にTAXIをやっていたんだけど、ドラムのFrancescoが急逝してしまったこともあって、セカンド・アルバムをリリースした2007年に解散したんだ。その後にGIUDAとして再編成し幾度かのメンバー・チェンジを経てMichele(ギター)とDaniele(ドラム)が仲間に加わったんだ。そしてファースト・アルバム『Racey Roller』を2009年にレコーディングして、翌年にリリースしたんだよ」

■TAXIはもっとUKパンク・ロック的なアプローチだったと思うのですが、グラム・ロックからの影響が強い音楽/GIUDAをやろうと思ったキッカケは何だったのですか?

「そうだな、俺はずっとSLADEやSWEET、MUD、SUZY QUATTROといったバンドのファンだった。だけど『Velvet Tinmine』みたいなコンピを聴くようになってからは、どんなジャンルに対しても熱心になったんだ。

GIUDAのサウンドを構築している要素は多岐に渡っていて、60年代のUSバブルガムであったり、70年代初期のグラム・ロック、HECTORやIRON VIRGINといったジャンクショップ・グラムのマイナーなバンド。それにTHIRD WORLD WARやFACESといったラフなサウンドのバンドや、EASY BEATSやAC/DCみたいなオージー・ロックまでといった感じでね」

■イタリアにはGIUDAという同名のクラスト・ハードコア・バンドもいますが、知っていますか?どうしてGIUDAと名づけたのですか?

「これといった理由はないんだよ。響きが気に入っただけでね。うん、もう一つの"GIUDA"のことは知っているよ」

■イタリア語ではなく英語で歌っていますが、どうして?

「英語で歌うのは"感覚的"な理由さ。イタリア語のロックンロールなんて酷いものさ」

■『Let's Do It Again』のレコーディングについても聞かせてください。順調にいきましたか?

「『Let's Do It Again』のレコーディングは2012年の12月にローマで始めたんだ。主だった違いと言えば、『Racey Roller』は"考え抜かれた"上で到達したサウンドだったので、『Let's Do It Again』に対する俺たちのアイデアは明確だったってことかな。このニュー・アルバムは一聴すると『Racey Roller』よりプロデュースされていると感じるかもしれないが、それは全くの正反対なんだ。サウンドは"カッチリ"してなくてもっとラフなんだよ。

他の違いと言えば『Racey Roller』のギターは俺だけが弾いているんだ。Mikeのセカンド・ギターは後にオーヴァー・ダビングされたものでね(彼はまだバンド・メンバーじゃなかったんだよ)、それとベーシストのDaniloが『Racey Roller』ではドラムを叩いている。Danieleと交代する前のことだったからね…。だからバンドにとってはニュー・アルバムに対する"思い"の方がより強いんだ」

■"Fat Boy Boogie"でコーラスを担当しているSara Imperatoreとは誰ですか?ニュー・アルバムに参加しているミュージシャンは全て友人なのですか?

「うん、レコーディングに参加したほぼ全員が俺たちの友達なんだ」

■GIUDAといえば音楽だけでなく、まるで中古盤のようにデザインされたレコード・ジャケットも素晴らしいです。

「あぁ、グラフィックはバンドに本当に何かをもたらしてくれるし俺たちにピッタリのアートワークさ。デザインは全てフランス人の友人でグラフィック・デザイナーのTony Crazeekidにやってもらって

いるよ」

■イタリアの70'sパンク・ロックや80'sハードコアは子供の頃に聴いていましたか?KLAXONやDECLINO、NEGAZIONE、WRETCHEDとか。

「ハードコアやOi!には興味がなくてね、俺が好きだったのはTHE GAGS、SORELLA MALDESTRAやRANCID Xといったイタリアン・パンク・ロックだけなんだ」

■最近お気に入りのバンドは?

「そうだな、好きなバンドというのは今はそんなにいない。最近のお気に入りでイタリアのバンドと言うとFAZ WALTZかな。SPARKSやT.REX寄りのスタイルでグラムの影響を強く受けているバンドさ」

■好きな日本のバンドはいますか?「Number 10」EPを日本のWATERSLIDEからもリリースしましたが、どういう経緯で?

「日本で「Number 10」をリリースしたのは俺たちのアイデアじゃないんだ。イタリアのレーベル、Surfin'Kiがリリースして彼らが全てやったことさ。若かった頃は日本のパンク・ロック・バンド、THE STALINが好きだったよ。"ロマンチスト"って曲が好きだったな」

■ところで、僕は何年か前にTAXIのメンバーと東京・西新宿で会ったことがあるのですが、あなたじゃないですよね?

「うん、それ俺だよ。何年か前に兄弟と東京を訪れてね、レコード・ショップにも行きたかったんだ」

■では、あなたにとってこのバンドとは一体何なのでしょうか?

「12歳の頃から、音楽こそが俺の人生だった。GIUDAには感謝しているよ。この数年はこのバンドが俺の本業になっているしね。俺は自分がすごく幸運だと思うし、多大なる情熱をもってこのバンドをやっているよ」

■今後の予定は?

「最新アルバム『Let's Do It Again』のプロモーションのために、世界中でたくさんのショーをやっているところさ。だけど次のアルバムのため、すでに曲作りにもとりかかっているぜ」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。読者にメッセージをお願いします!

「すぐにでも君たちの美しい国へ行ってプレイしたいよ。チャオ」



LASHING SPEED DEMONS VOL.16

el zine的グラム・ロック入門編

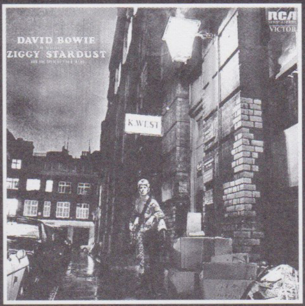
今回のお題はグラム・ロックです。前回の山口冨士夫同様、山路編集長のリクエスト。GIUDAのインタヴューというタイミングに合わせて、グラム・ロックとはそもそも何ぞや、というのをここで改めて語ってみましょう。もちろん、el zine向け(?)な感じで。よろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる

グラム・ロックというのは、70年代初頭のイギリスで勃興し、パンクの登場と入れ替わるようにして70年代半ばには終息したムーヴメント(同時期にアメリカや他の国でも似たような動きがあった)。一般にデイヴィッド・ボウイやT.REXやROXY MUSICなんかが代表格として挙げられるが、この時代にグラム・ロックと呼ばれたバンドやミュージシャンは実に多く、かつ音楽性も幅広く、音楽としてこういうスタイルのロック、と限定的に語ることは出来ない。

極めて大雑把に言うと、その特徴はメイクを施した両性具有的で派手なヴィジュアル("グラム"は"グラマラス"の略)と、当時のメインストリームなロック(プログレやハード・ロック)のアルバム・オリエンテッドな大曲志向やテクニック志向に反発するような、ポップなメロディ重視のショート・チューン/シングル志向…ということになると思う。特に"反発"(あるいは反抗または反動)というのはひとつの重要なキーワードと言えるだろう。

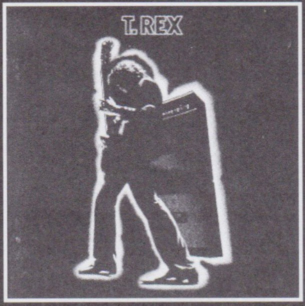
そもそもロックの歴史自体が、言うまでもなく反発/反抗(そして反動)の歴史でもある。50年代にR&Rが登場して以来、R&R/ロックは大人社会や世間的な良識への反発、という側面を持ち続けていたし、それはロックが一大産業となった今でも決して廃れてはいない。更に言えば、エルヴィス・プレスリーが徴兵され、エディ・コクランやバディ・ホリーの死で50年代のR&Rが下火になった後、60年代前半にR&R色の薄いポップ・シンガーたちが人気を博したのも、またひとつの反動だったとも言えるワケで、ロックやポップ・ミュージックの歴史は、常にそ



DAVID BOWIE『ZIGGY STARDUST』



ROXY MUSIC『ROXY MUSIC』



T.REX『ELECTRIC WARRIOR』

れ以前にあったスタイルへの反発や反動の繰り返し、と捉えることも出来る。

70年代初頭の時点で言えば、反発すべき対象は例えばKING CRIMSONやYESやDEEP PURPLEやLED ZEPPELIN(あるいは内省的なシンガー・ソングライター勢や、カジュアルまたは地味なルックスのアメリカン・ロック勢も)、そして反発の結果として生まれてきたのがグラム・ロック…と、もの凄く単純に図式化すればそういうことになるだろう。実際にはそれほど単純だったワケじゃないが(グラム・ロックの多くはハード・ロック的な部分も兼ね備えていた。一方でROXY MUSICあたりにはプログレの要素も多分にあったし、デイヴィッド・ボウイの代表作『ZIGGY STARDUST』はかなりコンセプチュアルなアルバムだった)。

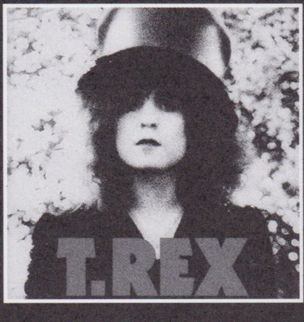
キーワードとすべきは、他にもある。反発/反抗の一方で、グラム・ロックには"継承""再解釈"(あるいは曲解)という面も大きかった。何を継承し何を再解釈したかといえば、当時主流だったロックではない、それ以前の音楽や文化、ということになる。端的な例を挙げれば、マーク・ボラン(T.REX)のキンキラキンのスーツや、ROXY MUSICデビュー当時のブライアン・フェリーのデフォルメされたリーゼントなんかには、エルヴィス・プレスリーの悪趣味な戯画化とでも言うべき部分があった。

そのまま継承するのではなく、徹底的にデフォルメ/曲解することによって特有の新しさを持たせる、というのも、グラム・ロックの重要な一面だったと思う。ROXY MUSICの1stアルバム『ROXY MUSIC』(1972年)の1曲目が「Re-Make/Re-Model」というタイトルだったのが、それを象徴していたと言えるだろう。当時主流のロックに反発しつつ、それ以前の様々なロック、そしてロック以外の要素(第二次世界大戦以前や19世紀の文化やファッションまで)をも自己流に再解釈して取り入れる…その自己流度合いによって、百花繚乱、種々雑多なスタイルのグラム・ロックが生まれた(化粧に関して言えば、ハード・ロックに代表されるマッチョイズムへの反動であると同時に、当時のゲイ解放の機運をゲイじゃない人たちまでがエンターテインの一要素として模倣した、というのもあったと思う)。

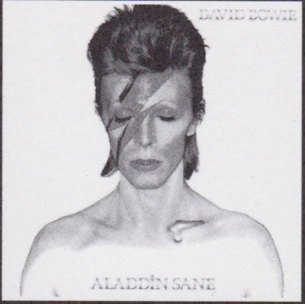
主流の音楽や社会の旧弊に反発/反抗しつつ、昔のR&Rから取り入れるべきところは取り入れて再解釈し、短い楽曲を中心に新しいムーヴメントを生み出した…と言えば、何よりパンク・ロックがそうだった。グラム・ロックが全部パンクに直結しているワケじゃなかったが、ムーヴメントとしての共通点は大きい。多くのパンク・バンドがグラム・ロックからの影響を広言しているのは当然とも言える。スタイルこそ違えど、ヴィジュアルのドギツさという面でも両者は通じている。

…限られた誌面でグラム・ロックの成り立ちと構造をざっくりと説明すれば、以上のような感じになると思う。ともあれ、T.REXが代表作『ELECTRIC WARRIOR』をリリースした1971年頃から、グラム・ロックと呼ばれる連中が大挙して登場する。ざっと挙げるだけでも、その個性は実に様々だ。

ポップでキャッチーなエレクトリック・ブギーにマーク・ボランの奇妙なヴィブラート・ヴォイ



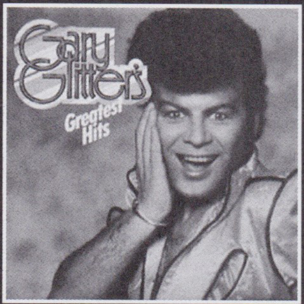
T.REX『THE SLIDER』



DAVID BOWIE『ALADDIN SANE』



THE SWEET『GIVE US A WINK』



GARY GLITTER『GARY GLITTER'S GREATEST HITS』

スを乗せて"T・レクスタシー"と呼ばれる熱狂的な人気を得たT.REX。両性具有通り越して宇宙人を演じ、当時のグラム勢の中でも際立ってアーティスティックにして完成度の高い作品を作り上げたデイヴィッド・ボウイ。伊達男ブライアン・フェリーと奇怪なるブライアン・イーノが並び立ち、R&Rもプログレ/アヴァンギャルドもキャバレー/ヴォードヴィル調も全部ぶち込もうとしたかの如き初期ROXY MUSIC。この3組が、とりあえずは代表格中の代表格、ということになるだろう。

ポップなバンドからアヴァンギャルドなバンドまで、詳しく挙げて行けばキリがないので、以下多少なりともel zine向けと思われるあたり(つまり後のパンクへの影響や関わりが大きそう)をつまんで列挙しておくと…まずはティーン向けのアイドル・バンドから出発してポップで明快なハード・ロックに転じたTHE SWEET。キャッチーでワイルドなR&Rで80年代以降のヘヴィ・メタルにも影響を及ぼしたSLADE。THE ROLLING STONES+ボブ・ディランとも言うべきR&Rにグラマラスな意匠をまぶした後期MOTT THE HOOPLE。60年代前半から売れないシンガーをやっていたのが、グラム時代になってツイン・ドラムのズンドコ・サウンドで国民的人気者となったゲイリー・グリッター(英国でグラム・ロックは"グリッター・ロック"とも呼ばれる)。パンク・ムーヴメントの時代に宗旨替えして(?)THE BOYSとなったHOLLYWOOD BRATS etc…。化粧をしているからと言って必ずしも美しいワケでも中性的なワケでもないバンドも多く、裾野は実に広かった(後にAC/DCで金切り声を聴かせるブライアン・ジョンソンが在籍したGEORDIEも、当時はグラムに分類されていた)。

先に書いたとおり、同様の動きはアメリカでも同時多発的に起きていた。元THE VELVET UNDERGROUNDのルー・リードも1972〜73年頃はメイクしてステージに立った。デイヴィッド・ボウイの尽力で再編したIGGY & THE STOOGESの凶暴なR&Rはパンクに直結(イギー・ポップは、グラム、パンク、グランジ…と反動的なムーヴメントの度にフィーチュアされる人だ)。THE ROLLING STONESをグラム風に再解釈したかの如きNEW YORK DOLLSにはもちろんジョニー・サンダースがいた。そしてグラム・ロック以前からそれ風のルックスだったアリス・クーパーの存在も重要だ。イギーやジョニーなど、当時のアメリカ勢にはイギリスのグラム・ロッカー以上に直接的にパンクに影響したと思われる人が多いのも興味深い。

しかし、パンク・ムーヴメントが長くは続かなかったように、

グラム・ロックも長くは続かなかった。ブームとして人気を得るうちに、グラム・ロックが元々持っていた反骨や逸脱性といったエッセンスは、失われていく。デイヴィッド・ボウイやROXY MUSICら元々才能のあった連中は、スタイルとしてのグラムに安住することなくさっさと次のステージに移行していた。一方でSLADEやゲイリー・グリッターなどは、変転するシーンの中で急速に賞味期限切れ/時代遅れの様相を呈し始めていた。

パンクの後にニュー・ウェイヴがあったように、グラム・ロックの後にも"モダン・ポップ"などと言われる連中が出てきてはいた。一方、SPARKSやBE BOP DELUXEといったモダン・ポップ勢がデビューを果たした1974年に、グラムの意匠をある程度借用しながら割り切ったポップで大ブレイクを果たしたのがあのBAY CITY ROLLERS…。グラム・ロックの"仮想敵"だった大仰なプログレやハード・ロック勢も70年代後半に入ると相次いで解散あるいは活動停滞し、シーンは次の反動を待つばかりとなる。グラム全盛期、既にシーンの裏側ではパブ・ロック勢がうごめいていた。そして、よりワイルドにしてストリートに根差した（そして単なる反動ではなく、自覚的にアンチなアティテュードを持った）パンク・ロックが登場することに…。

ともあれ、グラム・ロックがパンク・ロックに、そしてパンク以降のロックに与えた影響は大きい。カヴァー曲だけでも、THE DAMNEDやニナ・ハーゲンがTHE SWEETの「Ballroom Blitz」を、SUZY & LOS QUATTROが同じく「Fox On The Run」を、THE EATERがT.REXの「Jeepster」を、THE RUNAWAYSがSLADEの「Mama Weer All Crazee Now」を、ONE WAY SYSTEMが「Cum On Feel The Noize」を、ポジティヴ・パンク/ゴスに発したTHE MISSIONが同じく「Merry X'mas Everybody」を、そして元THE RUNAWAYSのジョーン・ジェットがゲイリー・グリッターの「I Love You Love Me Love」を、BLITZがルー・リードの「Vicious」を。更に東京のSUPERSNAZZがHELLOの「Tell Him」を。同じく東京のTHE BOTSはMUDの大ヒット曲「Tiger Feet」を日本語ロカビリー化（！）して「東京ジャンクタウン」に。ゴスの開祖（？）BAUHAUSに至ってはデイヴィッド・ボウイ「Ziggy Stardust」にT.REX「Telegram Sam」にブライアン・イーノ「Third Uncle」とカヴァーしまくっている。

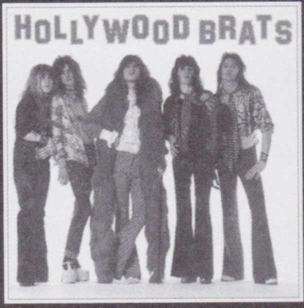
THE CLASH結成以前のミック・ジョーンズがLONDON SSでMOTT THE HOOPLEのセンを狙っていたのは有名だし、ADAM AND THE ANTSのツイン・ドラム編成がゲイリ



SLADE『SLADEST』



MOTT THE HOOPLE『LIVE』



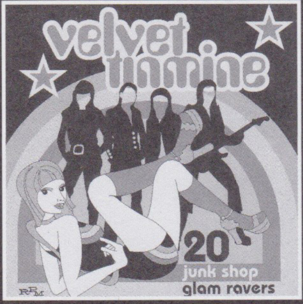
HOLLYWOOD BRATS『HOLLYWOOD BRATS』



NEW YORK DOLLS『NEW YORK DOLLS』



SUZI QUATRO『SUZI QUATRO』



VA『VELVET TINMINE』

ー・グリッターの影響を受けていたのは明白だ。RAPEDやV2といった“グラム・パンク”なバンドも登場したし、一方スキンズの聖典『Oi! THE ALBUM』を聴けばCOCK SPARRER「Sunday Stripper」でグラム・ロックによくあったズンドコのブギー・ビートを聴くことが出来る。BLONDIEがプロデューサーとして迎えたのは、グラム全盛期にMUDやスージー・クアトロ(彼女がイギー・ポップやアリス・クーパー同様、パンクな音のふるさと・デトロイト出身だったのは興味深い)など多くのヒットを手がけたマイク・チャップマンだった。

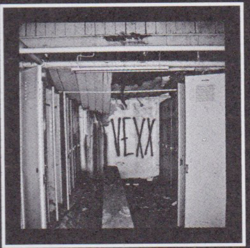
そしてCDの時代が到来して以降、再発の恩恵もあってキッチュでポップ、ワイルドでいかがわしいグラム・ロックは時代背景抜きにして若い連中に評価されるようになる。一方で音源発掘も進み、近年はリアルタイムで評価されなかったようなバンドまでがかつての名バンドと並列に聴かれるようになり、若いバンドに影響を与えるようにもなっている。GIUDAがインタヴュー中でB・C級(?)グラムの編集盤『VELVET TINMINE』(2003年リリース)を挙げていたのが象徴的だし、一見スキンズ風(?)のルックスで特にグラマラスというワケでもないGIUDAのアルバムに、かつてニッキー・チン&マイク・チャップマンのプロデュース・チームがスージー・クアトロなどで多用した“ドッドダッダドッドダッダ”と鳴り響くブギー・ビート(特定の音楽スタイルがない…と言いつつ、グラム・ロックと言えば真っ先に連想されるのがこのリズムだったりする)の曲が多いのも感慨深い(先に挙げたCOCK SPARRERを思い起こす)。

ブギーとか化粧とか大まかなイメージはありつつ、グラム・ロックは幅広くて特定のスタイルで括れない…というのは先に書いたとおりだ。そうすると、現在のロック・シーンで見た目が派手じゃないバンドがある種グラム・ロックっぽい音を出していたり、逆に音楽性がどうあれヴィジュアル的にはグラムを思い起こさせるバンドがいたり…というのもある程度納得な感じがする。ハードコア・バンドがよくやるフェイス・ペイントだって、(意図は別として)グラムの残り香…と言えなくもない、のかも知れない。この原稿はグラム・ロックを知らないel　zine読者様向けという企画意図があったが、ストレートなパンクを演っていたTAXIが本来の趣味性を出したらGIUDAになったように、ハードコア聴いたり演ったりしている人の中にも、実はグラム・ロック好きな人は、けっこういるんじゃないかと思う。

ES GIBT KEIN WERT

ある日突然、バンド・ブーム期のバンドTHE FUSEの"BOYS & GIRLS"という曲が脳内再生されたんですよ。それで"今は僕等の世代〜♪大人は黙って見てて〜♪"と独りで歌っていたら無性に聴きたくなったので彼らのアルバム『HAPPY! HAPPY!』を中古で買い直し(※210円/ハッピーすごろく付き)聴きまくっている今日この頃です。青臭いにも程がある永遠のピーターパン的青春謳歌ソングを聴いていると、何故か泪がこぼれます。イエス!90's GENERATION!

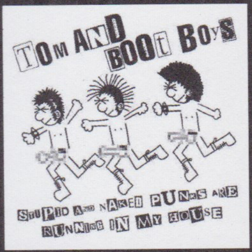
VEXX/ST



女性がフロントに立つワシントンのロックンロール・パンク・バンドの処女作で、8曲入りの12インチ。人間の狂気を静謐に描く"STRESS"なんて曲から幕を開ける、不穏な空気に充ち満ちたサイコでサイコーな一枚。鋭利なナイフを眼前に突きつけられているような緊張感溢れる楽曲に、カオティック且つグルーミィにのたうつヴォーカル。メンバーのルックスも地味だし、派手でキャッチーな曲でもないので絶望的に人気は出ないでしょうが、ションベン臭いガキのパンク・ロックに閉口している方はゼヒ。脳味噌が芯からビリビリ痺れます。

(GRAZER RECORDS 03)12"

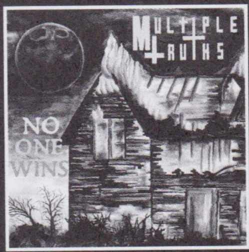
TOM AND BOOT BOYS/STUPID AND NAKED PUNKS ARE RUNNING IN MY HOUSE



ぶっちゃけ、僕は2ndシングル「PUNKS ARE FUCKED UP」が一番好きだったのですが、本作はそれを超えています。もうメチャクチャ格好良い!過去作よりもギターが少しノイジーにひしゃげていますが、それ以外に大した違いはないです。いつも通りです。なのに、妙に格好良い。40過ぎて"I HATE SUIT MEN"なんて曲をヤル。初期の"KILL THE DJ"とレベルが完全に一緒です。紆余曲折ありながらもヤリ続けているバンドは違うなと痛感しました。初期衝動そのまんま、20年間延々と勃起し続けているようなもんです。スゴイ!

(POGO77 RECORDS POGO57)7"

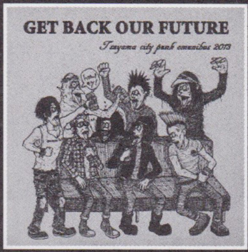
MULTIPLE TRUTHS/NO ONE WINS



強靭な女性ヴォーカルがとことん叫び倒す、堅牢強固な音塊の米国ネオ・クラスト・バンドのデビューLP。もう一分の隙もなく、全体がビシッ!と引き締まっていて完成度が高く、そこがイイと言えばイイんですが、もう少し遊びがあってもイイような気もします。が、それでも存分に燃える音。レーベル・インフォを見てみると"ヘヴィなUSハードコアとヨーロッパのメロディック・パンクが半々ずつだね。BALLAST meets FROM ASHES RISE meets GORILLA BISCUITSだよ。マジで"と書いてあって(意訳)、巧いこと言うもんだなと感心しました。

(HALO OF FLIES RECORDS 54/RELIGIOUS PLAGUE RECORDS 01)LP

VA/GET BACK OUR FUTURE-Tsuyama city punk omnibus 2013



THE RUSTED、LAST、obstinacy、STICKYS、32x38、BLACK HUMOR CONTROL、DEATH DUST EXTRACTOR、MASSGRAVE、SKIZOPHRENIAの9バンドが各2曲ずつを収録している津山オムニバス。多種多様なスタイルがひしめく一枚なのですが、とにかく衝撃的なのが初っ端のTHE RUSTED。ex THE SICKのメンバーらによるバンドとのことですが、スンゴクMASSっています(注:"MASSHYSTERIスタイル"の意味)!ギター・トーンから曲名、アートワークまでモロ!本家亡き今、MASSフリークスの心の隙間を埋めてくれるのは彼らです!

(VOX POPULI RECORDS 003)CD

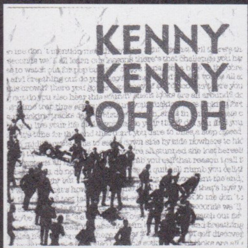
ボンクラ峠/田んぼと煙突



前号でレヴューしたTURTLE ISLANDのヴォーカル・永山愛樹がギター/ヴォーカル/"屁"を務めるプロジェクト・バンドの、初となる正式音源。亀島よりも肩の力が抜けたゆる〜いスッピンの音楽だが、装飾がない分、生々しい程に人間臭く、且つ現実的でラディカルな面があらわになっているように感じられる。COLORED RICE MENの"人間FUCK OFF"とPILE DRIVERの"勇気"の秀逸なカヴァーに、京都メトロでのライヴ音源も収録した全11曲。ボンクラだけどヘラヘラ笑っているだけじゃない、命を燃やしているボンクラです。

(MICRO ACTION MA/CD6)CD

KENNY KENNY OH OH/ST



ドイツのオール・ガールズ…否、大人なお姉さん4人組による1stシングル4曲入り。何のヒネリもない極々シンプルなパンク・ロックそのもので、UmeåのTHE BOMBETTESも一瞬頭をよぎりましたが、あんなに華奢じゃない、やっぱりドイツな骨太感。このバンドがパンクの歴史にその名を遺すことは決してないでしょうが、利発で伸びやかな歌唱とキャッチーな演奏に、僕の心と体は無条件に弾むのです。しかしこのバンド名、日本語(感覚)だと「ヒロシ、ヒロシ、嗚呼、嗚呼」みたいなもんだよな…。

(EMANCY PUNX RECORDS 30/CONTRASZT! RECORDS 38)7"

THISCLOSE/1986-2013



日本ツアーを熱望しているため、頑張って"営業活動"を展開していますが、そのやり方が非常に地道&真面目なので好感が持てます。どうしてもこのバンドの最大のウリが『GRAVE NEW WORLD』な高音ヴォーカルなので、そこにばかりツイツイ目が行ってしまいますが、改めて聴くと確かに曲調はヴァラエティ豊か(っても全部DISCHARGEスタイル)。本作は既発音源をまとめた便利な15曲入りの編集盤です。ただ、まぁ、こういうバンドはCDでまとめて一気に聴くよりかはアナログ盤の方が似合いますよね。

(OUR FUTURE OF02/DELUSION OF TERROR DOT029)CD

SECOND HAND VINYL 最近買った中古盤を紹介するYo!

VA/NEW WAVE FROM THE HEART (CRASH RECORDS BANG002)LP





1979年に1000枚プレスでリリースされたらしいのですが、全然流通されなくて売れたのが200枚のみ。残りの800枚はレーベル・オーナー宅のワードローブに放置プレイされていたというUKパンクのレア・コンピ!…の98年再発盤。
70'sパンク・マニアの方々には既に定番の作品なのかもしれませんが、全体を覆う気怠いC級臭さがたまらない一枚です。参加バンドはTHE SQUAD、THE DIKS、SUBLIMINAL CUTS、EYES AT RISK、THE NEGATIVES、THE PRAMS、VICE SQUADの7バンド。「VICE SQUADしか知らねー」と思ったそこの貴方!このバンドはBeki BondageのVSじゃなくて、Roger Jacksonという男性がヴォーカルのVSです。しかも他の参加バンドはメンバー写真を掲載していますが、VSだけ意味不明なネジ4本…。
このVSに限らず全バンドが退廃的にダルソーな演奏なのですが、しかしそれでいて全バンドが異様に格好良いという奇跡!THE SQUADの"Suicide"なんて脱力し過ぎて死ぬのも億劫そうな曲ですが、不思議とKillerなのです!
更には、「あの70'sスタイルのバンドのあの曲の元ネタはこれか!」という楽しみ方もできる、一粒で二度美味しいVINYLなのでありました。

editor's notes

"MASSっている"という言葉を流行らそうと画策していまして、INVSNとES GIBT KEIN WERTのページで使ってみました。今年の夏にはブレイクするはずです(どこで?)。
さて、何だかパンクパンクでファンジンファンジンしたel zineにしてみたくて、全ページを黒くしてサイズもまた変えてみました。あわせて、消費税やらナンダカンダで色々なモノ、本やレコードも高くなっているご時世なので価格も抑えてみました(ヴォリュームも控えめですが…)。この手のパンク/ハードコアを聴かない人も気軽に手にしてもらえればな～と思いますが、どうなんでしょ?好評だったらこの形でしばらくやってみたいと思います。ではでは、今号もお読み頂きありがとうございました!また次号で!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

el zine vol.15 2014年4月20日発行 E-MAIL unno13@gmail.com

※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店 又はhttp://www.juzasha.com/にてお求めになれます

CROSS PUNK WORD

1	2	3 F	■	11	12		■
4			D	E			■
5			■	13			16
	■		■			■	
6 A	8	■	14			17	
7 B		10	■	15			
9		C	■	■	18		■
■	■	19		■	20	G	

創刊時からやろうやろうと密かに思っていたパンクなクロスワードです。「スゲー簡単」と「誰も分かんねぇよ!」な問題の差が激しいですが、とりあえずネットとか使わずに全て解ける人がいたら(色んな意味で)ヤバイです。タテの⑪⑫なんて単独だと回答不可能ですが、先にヨコを埋めるとある程度は絞れます(多分)。そしてABCDEFG欄に入るアルファベットを順に並べると、今号のどこかで名前が挙げられているバンド名になります。だからどうした?無為この上ない行為ですが、LET'S TRY!

ヨコ

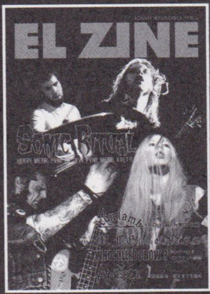
①2014年5月にNYから来日●●●BOYS　④1st EPは「DET BITTRA SLUTET」/80'sスウェディッシュHCバンド　⑤80's UKオール・ガールズ・バンド/GY●●●IPS　⑥フィリピンのオブスキュアHCバンド/●●A　⑦初期はメロコアだったけど後にゴス化　⑨MINOR THREATのVoの名前or「BURNING BRITAIN」著者の名前　⑪80'sボストンHCバンド/●●●TERS　⑬ポーランドのベテラン・クラスト・バンド/INFE●●●●　⑭80'sスパニッシュ・パンク・バンド/●●●●●VILLE　⑮●RUE ●OUNDS ●F ●IBERTY　⑱RIISTETYTとWOLFPACKのメンバーらが在籍した/●●RITILA　⑲FOR MY COUNTRY♪/●●DECAY　⑳LET'S GET DRUNK BEFORE IT'S TOO LATE!/●●●STENZ

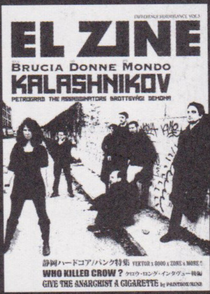
タテ

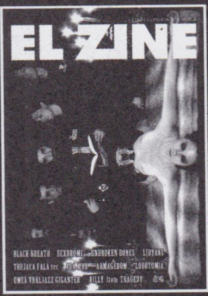
①SA/●●●●●●●ATTACK　②ANTI CIMEX/RAPED●●●　③昔、そんなパンク雑誌があったらしい　⑧ブラジルD-BEAT/●EATH●ROM●BOVE　⑩メシ喰うな!　⑪旧ユーゴのアナーコ・パンク/カルト!　⑫ジャーマン・ファスト・コア!　⑯ボストン!●●●●!カント!　⑰前号の表2で流血しているバンド

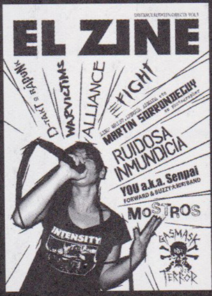


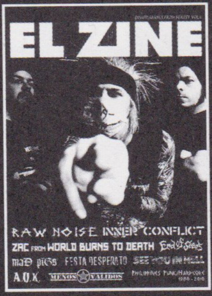


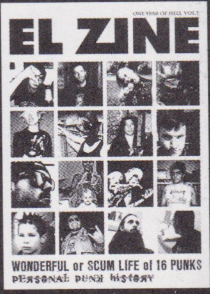


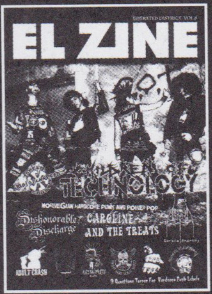


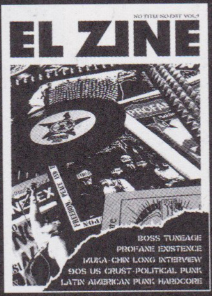


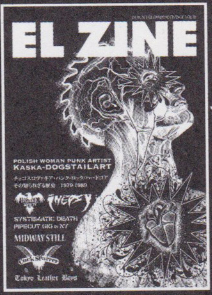


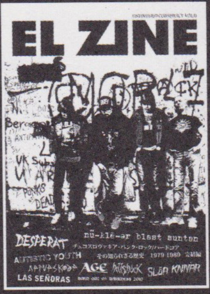


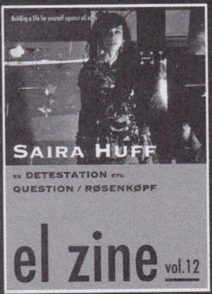
















your punk, not my punk!

el zine vol.15 400yen